

地震・津波補遺史料

都司嘉宣編

まえがき

武者金吉が編集した「増訂大日本地震史料」三巻、「日本地震史料」一巻（以下これら計四巻を、引用符をつけて「史料」とよぶ）は、いうまでもなくわが国の歴史地震、津波研究の上での、最大の根本史料集である。ところが筆者は「史料」に引用された文献の原典にあたってみると、しばしば「史料」に採録すべき文章が、採録もれとなっているのに気づいた。そこで、武者の「史料」を補足する目的で「群書類従」（正、続、続々の各編）、「大乘院寺社雑事記」、「多聞院日記」、「吾妻鏡」の四種類の原文献を追調査してみた。この史料集は、これら「採録もれ地震史料」を集めたものである。

「群書類従」（正編・続編）は十八世紀末から十九世紀初めにかけて塙保己一が編集した古書の大叢書で、正編、続編合わせて千六百八十巻に及ぶ。古代、中世および江戸時代初頭までの主要文献が多く含まれていて、「郡書類従刊行会」の良質の校訂活字本が刊行されている。同会からは更に塙保己一の事業を継いで、「続々群書類従」が刊行されている。

「続群書類従」の印刷本第三十四、三十五、および三十六巻に載録された「満濟准后日記」、「看聞御記」、および「お湯どのの上の日記」の京都で書かれた三種の日記からは、特に多くの新史料が発掘された。

「大乘院寺社雑事記」と「多聞院日記」はともに奈良興福寺の支院である大乘院と多聞院で書き継がれた日記で、室町時代から江戸時代の初頭にわたる年代の、奈良のありさまを日記体で伝えるほとんど唯一最大の史料である。

「吾妻鏡」は治承四年（1180）から文永三年（1266）に至る鎌倉時代前半の幕府の消息を伝える日記体の史料である。百八十一個の地震史料が含まれているが、武者の史料採取はほぼ完べきであって、採録もれ史料はわずか一個しか見出し得なかった。

武者は「地震史料」として、地震そのものの記事のほか、山陵などの鳴動現象、大規模な山崩れ、泉・温泉の湧出し、噴火、降灰、日月の異常、湖海の水の変色現象なども採取しているが、本史料集も、この規準で文献調査を行なった。武者が原文献調査をするさい、彼が意識的に採録しなかったと思われる一群の「地震史料」がある。それは、地震のために行なわれた改元（年号変更）記事、比較的小規模な鳴動、山崩れの記事である。また伊勢神宮などで行なわれた地震祈禱記事も、ごく一部しか採録されなかったようである。この史料集ではこれらの史料にも防災研究上有益な情報を含んでいると判断して、史料として採取することにした。

本史料集作成のため追調査した原文献は、武者が調査した文献の全体と比べれば、まだまだほんの一部分にすぎないものである。中世に記された他のいくつかの日記文献についても、いずれ追調査を行ない、地震・津波史料の集積事業をより完全なものとすることを期することとしたい。

本調査を行なうさい、ご支援をいただいた、平塚市立図書館の職員の皆様に感謝を申し上げます。

（編者は国立防災科学技術センター平塚支所沿岸防災第一研究室）

Supplementary Data on Historical Earthquakes and Tsunamis in Japan

By

Yoshinobu Tsuji

Hiratsuka Branch

National Research Center for Disaster Prevention, Japan

Abstract

Through investigation of four kinds of historical documents, records of earthquakes and tsunamis were collected. The documents are as follows:

- a) Gunsho-Ruiju, "The Library of Historical Documents",
- b) Daijo-in-Jisha-Zojiki, "The Diary of Daijo-in Temple",
- c) Tamon-in-Nikki, "The Diary of Tamon-in Temple",

and,

- d) Azuma-Kagami, "The Daily Record of Kamakura Shogunate".

a) is a great series of documents of ancient and medieval ages and consists of 1680 volumes in all. Both b) and c) are diaries written by the priests who lived in Nara city in 15th and 16th centuries. d) involves the descriptions of the matters which occurred in Kanto District in the years of 12th and 13th centuries.

Musha published 4 volumes of "Historical Data on Japanese earthquakes, revised ed." (1942-1949). He had also investigated these four documents, and collected records. In this paper only the articles which had not been reported in his books are described.

本書利用上の注意

- 一、本史料集は、武者金吉編「大日本地震史料」全3巻を補足する目的で、「群書類従・正編、続編、続々編」、「大乘院寺社雜事記」、「多聞院日記」、「吾妻鏡」を追調査し、武者の「史料」に採録もれとなった地震史料を集めたものである。
- 二、「地震史料」としては、地震記事のほか、津波記事・噴火降灰記事、山陵社殿の鳴動記事、山崩れなどの地変記事、湖海水の変色記事、泉・温泉の湧出記事などを含むものとし、これら諸現象の記事をすべて収録した。
- 三、本書の体裁も「史料」のそれにならない、個々の地震を年代順に排列し、各地震について総括文(綱文)、文献名、史料本文、および必要に応じて注釈文を、それぞれ記した。
- 四、総括文には通し番号をつけた。また、「史料」にその地震の他の文献の記事がすでに掲載されているときには、たとえば(1-34)(1-36)のような形で文末に注記した。これらはそれぞれ「史料」第一巻三十四ページ、あるいは、第二巻三十六ページを参照せよ、という意味である。
- 五、西暦は一五八二年以前、一五八三年以後を通じてグレゴリオ暦を用いた。「史料」、理科年表の地震・火山の表、宇佐美龍夫著「資料・日本被害地震総覧」など地震に関する多くの書物でも、やはり一貫してグレゴリオ暦が使われている。一五八二年十月十四日以前の日付をグレゴリオ暦からユリウス暦に直すには、西暦の百位以上の二桁の数を n として、
$$r = n - 2 - \lfloor n/4 \rfloor$$
(「」はガウス記号で、小数以下切りすてを表わす。)なる数 r

を計算し、日付を r 日だけさかのぼらせばよい。たとえば、グレゴリオ暦の一四九八年九月二十日の場合には、 $r = 15$ であるから、 $r = 15 - 2 - \lfloor 35 \rfloor = 9$ となるので、一四九八年九月十一日となり、これがユリウス暦での日付となる。

六、地震発生日は、和暦、グレゴリオ暦日のほかにユリウス日(「JD」と略す)を記しておいた。日付のあとにある七桁の数字がこれである。これは紀元前四七一年一月一日から数えた日数で、たとえば一九八一年一月一日は、JD = 2444606である。ユリウス日については、たとえば理科年表の天文部を参照されたい。

七、「満濟准后日記」、「看聞御記」、「お湯どのの上の日記」、「大乘院寺社雜事記」、「多聞院日記」、「吾妻鏡」の六種以外の文献は、すべて「群書類従」の第何巻にあるかを、書名の下に \wedge を付けて表示しておいた。たとえば \wedge 正、 \wedge 33 \wedge とあるのは「群書類従正編、第三十二巻」に収められていることを示している。

八、当用漢字表に新字体のあるものは、それを使ったが、「弁」の字だけは、「辨」「瓣」、「辯」の区別を表示するため、簡体字を使わなかった。ただし原文にもとから「弁」が使われているときにはそのまま表示した。

九、文献名の角カッコの上に Δ 印をつけたものは、同文献の記事の一部がすでに「史料」に採録されており、本史料集にはその未採録部分のみを掲載していることを示している。

十、原文献に明らかに誤りがあると思われる場合には(○ママ)と小字注書きを添えた。○印のついてない(ママ)などは、原本にもとからついている注書きである。

十一、「群書類従」には、次の三つの伝説的な地変記事がある。

A、琵琶湖出現、富士山出現

〔諸社一覽六〕 \wedge 続々1 \wedge では孝靈天皇四年(BC 287)と云う。

B、琵琶湖竹生島出現

〔竹生島縁起〕〔八正、25〕では孝靈天皇二五年（BC 266）とい
い、また、〔諸社一覽六〕では、景行天皇十年（AD80）、ある
いは同十五年（AD 85）という。〔神皇正統録〕〔八統、851〕で
も景行十年という。

C、江ノ島出現

〔註画讃三〕〔八統、220〕に「欽明天皇十三年夏四月十二日戌刻
至二十二日、（○中略）大地震動、終日不息、（○中略）海上成
一島、曰江島。」などとある。

以上いずれも事実とは認め難いので、本文には掲載しなかった。

十二、印刷の都合で原文のそえ書きを直後に（ ）に入れて示した個
所がある。

十三、「防災科学技術研究資料第35・36号、（昭和五十四年三月発行）
には静岡県、長野県、山梨県の史料を収めた。本書はほとんどが近
畿地方の中世以前の史料集であるので、この両者には史料の重複関
係はない。

1 推古天皇三年三月（595—W—17～、1938486～）、土佐南海に大光、鳴動あり。

〔聖徳太子伝曆^上〕△続、189>
三年 春三月、土左南海、夜有大光、亦有声如雷、経卅箇日矣。

2 推古天皇七年四月二十七日（599—V—28、1939988）、大和に地震あり、屋舎壞れる。（1—4）

〔聖徳太子伝曆^上〕△続、189>
夏四月大地震、屋舎悉破、太子密奏曰、天為男為陽、地為女為陰、陰之理不足、即陽迫而不能通、陽道不慎、即陰塞而不得達、故有地震、陛下為女主居男位、唯御陰理不施陽徳、故有此譴、伏願徳沢潤物、仁化被民、天皇大悦、下勅天下、今年調庸税租並免。

3 皇極天皇三年（644）、大和の諸池水色変る。

〔聖徳太子伝曆^上〕△続、189>
又諸池水色皆變為太皁。

4 天武天皇六年十二月（679—1—21～、1969080～）、紫紫、豊後に大地震あり、山崩れ地裂け民舎多く破壊する。（1—5）

〔豊後国風土記〕○日田郡の条△正、499>
五馬山、在郡南、飛鳥浄御原宮御宇天皇（○天武天皇）御世、戊寅年、大有地震、山岡裂崩、此山一峽崩落、温泉処々而出、湯気熾盛、炊飯湯早熟、但一処湯、其穴似井、口径丈餘、無知深淺、水色如紺、常不流、聞入之声、驚愠騰壑一丈餘許。今謂温湯、是也。
○都司注。*字は天理本では「崗」、また*字は文意からすれば「愠湯」であつて「いかりゆ」と読むべきである。荒木田久老校訂本では「愠湯」が採用されている。

5 慶雲四年六月二十三日（707—Ⅳ—30、1979496）諸国大地震して樹木倒れる。（1—9）

〔如是院年代記〕△正、460>○「如是院」は京都建仁寺塔頭六月廿三日大地震動、諸国樹木皆僵仆、禁中講仁王経、木皆如故、鬼神悉逃散。

6 和銅三年八月十九日（710—Ⅹ—20、1980644）、大和に空中音あり。

〔仁寿鏡〕△続、853>
八月十九日夜半、空中有声、如大震動、諸神啓天照大神、天竺仏生国異金剛窟飛來熊野山。

7 天平元年（729）河内に地震あり、小松寺御堂崩壊する。

〔河内国小松寺縁起〕△続、801>○交野郡交野
仍同（○養老七年）十一月草堂一字如元造終遂供養了。天平元年己巳歳天下在大地震、彼御堂零崩、草創石仏堂屋云山谷流落給、爰天長元年（五十三代淳和天皇）歳次甲辰正月十三日、田原郷住人草堂建立童部類葉字中次郎成願主、如元造立件法堂。

8 天平元年八月十五日（729—Ⅹ—16、1987580）、大和暴風、長谷寺山崩れる。

〔長谷寺縁起文〕△正、437>
時天平元己巳歳八月十五日、及其夜半天風吹峯、龍王掣電大雨時降、成山崩石破之音心肝不安。

9 天平三年（731）、紀伊の海、水血の様な色となる。

〔神皇正統録^上〕△続、851>
同（○天平）三年辛未歳紀伊国海水変而血ノ如ナル事五日ヲ経タ

タリ。

10 天平六年四月七日 (734-V-18, 1989285)・畿内七道諸国大地震。(I-12)

〔神皇正統録上〕△続、851△

夏四月大地震。

〔仁寿鏡〕△続、853△

六、四月天下大地震。

11 天平十一年二月二十九日 (739-IV-15, 1991078)・肥前に地震あり。

〔松浦廟宮先祖次第并本縁起〕△正、25△ ○東松浦郡鏡村

天平十一年、(○中略)二月廿九日夜半、地震蕭牆之内者又詳也、大史所奏、故不煩重。

12 天平十四年一月二十三日 (742-III-8, 1992136)・陸奥で赤い雪ふる。

〔興福寺略年代記〕△続、857△

壬十四年、正月廿三日陸奥国雨赤雪二寸。

〔神皇正統録上〕△続、851△

同十四年壬午歲奥州二而赤雪降事二寸。

13 天平十四年六月五日 (743-VII-15, 1992630)・奈良で飯の様なもの降る。

〔興福寺略年代記〕△続、857△

壬十四年、六月〔五〕日夜京中往々雨飯。

〔神皇正統録上〕△続、851△

夏六月京中二於テ飯ノ如ナル物降下。

14 天平十九年二月 (747-III-20~, 1993974~)・下野山崩れあり。

〔東大寺縁起〕△続、993△

爰天平十九年二月自下野国山崩金流出之由奏之。其後称彼所□金崩。

15 天平勝宝年中 (749-756)・伊豆走湯湧へ。

〔走湯山縁起二〕△正、25△ ○熱海

高野天皇(○孝謙天皇)御宇、天平勝宝年中(○中略)、于時当山震動七箇日、湯泉沸出。

16 天平宝字六年四月二十四日 (762-V-26, 1999520)・信濃で暴風地震あり、家屋、樹木に多く被害あり。(I-17)

〔善光寺縁起集四〕△続、814△

天平宝字六年^{壬寅}四月二十四日。大風吹起大地震動。水内郡神社仏寺堂塔拝殿人民等之私宅乃至樹木皆悉無殘破壞顛倒八十餘所也。

而間諸仏像雖損亡、於善光寺精舎少無有破壊。○都司注(I-17)「続日本紀」の五月九日の日付は被害者へ救援穀物を与えた日を意味するのであろう。

17 神護景雲元年 (767)・伊豆走湯山鳴動し、血の様な雨降る。温泉四十二年間止まる。

〔走湯山縁起二〕△正、25△ ○熱海

同御宇(○称徳天皇)未^丁(○神護景雲元年)当山鳴動。如^レ血大雨降。(○中略)加之温泉乾涸、(○中略)神鏡不還湯

泉無涌。空送四十二年星霜。弘仁元年二月二十五日(○810-III-27, 2016992)・当山松樹花開、温泉所々涌。香

気谷々薫。

18 神護景雲二年七月（768—Ⅲ—21～, 2001799～）、伊勢光森鳴動する。

〔伊勢国風土記〕△正、500△
光森、神護二年秋七月。森中鳴動、而有異香。

19 延暦十九年三月十四日（800—Ⅳ—15, 2013359）、富士山噴火す。

〔神皇正統録上〕△続、851△
同十九年庚辰歲駿河国富士山自燒。山川水色皆紅ノ如。

20 延暦二十一年三月（802—Ⅳ—10～, 2014084～）、富士山東斜面に新山出現す。

〔富士山記〕△正、135△
山東脚下有小山。土俗謂之新山。本平地也。延暦廿一年三月雲霧晦冥、十日而後成山。蓋神造也。

21 承和年中（834～848）、富士山から軽石噴出する。

〔富士山記〕△正、135△
承和年中、從山峯落来珠玉。玉有小孔。

22 仁寿元年（851）、讃岐万濃池の堤防崩壊する。

〔讃岐国萬農池後碑文〕△続、978△
仁寿元年之秋、天下大水超堤上、少刻之間掃底而流、国中之池大小悉破。

23 斉衡二年四月九日（855—Ⅴ—2, 2033464）と十日、奈良地震あり、大仏の首落ちる。

〔東大寺要録上〕△続々、11△

大仏御頭落事。

斉衡二年壬四月丁巳（○九日）地震、戊午（○十日）亦震。庚午（○二十二日）東大寺奏云、毘盧舍那大仏御頭自落在地。

甲申（○五月六日）遣参議左大辨兼左近衛中将從四位上藤原朝臣氏宗東大寺、見大仏墜落之状。

〔和州旧跡幽考〕○添上郡△続々、8△
（○大仏の説明文）最初の再興は斉衡二年五月二十三日（帝王編

年五月二十五日、平家物語斉衡三年三月八日云々）毘盧舍那の大像のみぐしをのづから地におちさせ給ふ。（平家物語方丈記等には大地震に落ると云々）

24 元慶二年九月二十九日（878—Ⅹ—1, 2042048）、関東諸国大地震あり、相模大山寺火災発生す。

〔仁寿鏡〕△続、853△
二、九月大地震

〔大山寺縁起〕△続、804△ ○相模国

陽成天皇元慶三年大地震裂、仏像經典即時磨滅、処々僧坊逢神火作灰燼矣、八年安然和尚参詣当山巡礼聖跡、見其顛倒墜淚悲歎。○都司注、右の記事、元慶二年の誤か。

25 元慶四年十二月六日（881—Ⅰ—13, 2042852）、京都大地震あり。

〔仁寿鏡〕△続、853△
四、十二月六日大地震。

26 仁和元年十月（885—Ⅹ—15～, 2044619～）、京都砂降あり。

〔神皇正統録上〕△続、851△

此帝(○光孝天皇)御宇仁和元年乙巳歲秋十月沙石降苗損。
○都司注、同年七月十二日(81-27)以降、開聞岳が噴火して
る。

31 天慶元年四月十五日(938-V-22, 2063799)、京都大地震、

家屋被害あり、余震年末まで続へ。(1-116)

〔皇代記〕△正、31△

承平八年五月廿二日改元。依厄運地震并兵革也。(○〔皇代
略記〕△統、82△も同頁)

〔年中行事秘抄〕△正、86△

抑今年自春、妖言不絶、災異尤多、四月十五日、
大地震依度々卜筮。

〔尊意贈僧正伝〕△統、213△

27 仁和三年七月三十日(887-VIII-26, 2045268)、五畿七道諸国
大地震、京都で家屋転倒し、圧死者者多く、摂津は津波におそわ
れ、多くの溺死者を出す。(1-103)
〔神皇正統録上〕△統、851△
同歳七月晦日大地震、海水陸に漲上溺死者多シ。
〔仁寿鏡〕△統、853△
三、七月卅日大地震、天皇御南庭大藏省立幄五畿七道同日大震。
28 寛平元年五月二十八日(889-III-3, 2045945)、石清水八幡
宮震動する。(1-106)
〔神皇正統録上〕△統、851△
寛平元年己酉歳夏五月石清水八幡宮宝藏震動。

29 承平四年五月二十七日(934-VII-16, 2062393)、京都に強
地震あり。(1-114)

〔神皇正統録上〕△統、851△

同四年甲午五月廿七日大地震。

30 承平七年四月十五日(937-VI-1, 2063444)、近江に地震あ
り。

〔近江国別浦八幡縁起〕△統、74△ ○大津市膳所

人皇六十一代朱雀天皇承平七年丁酉四月十五日、依大地震倒鳥居。同
明年造鳥居。

○天慶元年四月十五日の地震(次項)の日次誤記か。

天慶一、四月十五日大地震、五月洪水。

〔仁寿鏡〕△統、853△

各有其料乎。今須仰諸国国宰。以其田地応輸。令修補件仏塔。若
建立寺塔、不施入田地、或破壊積年、修治失便、或修造其堂塔、
地内外四方、普以掃治、仏除草穢、灑散香水、若故幣塔寺難修理
者、以緒聖各一合、塗彼牆壁椽柱、不令致遺漏。修造之後、更扨
吉日、一日同時、奉供一燈。奉祈宝祚、若塔数不足万者、依無垢
浄光経説、清浄泥土、造相輪塔、滿一万余、成就御願。

32 天慶二年四月（939—W—27～、2064139～）より八月、京都で地震続々。
〔神明鏡〕へ続、852>

同年四月より八月ニ至テ大地動、毎日也。

33 天慶元年一月十四日（947—II—12、2066987）、天智天皇陵鳴動する。（I—125）
〔貞信公記〕へ続々>

十四日、空中有声如雷鳴、或人云、天智天皇山陵鳴也、又云、非山陵鳴。

34 天曆元年八月下旬（947—X—11～、2067229～）、若狭洪水、山崩れあり。

〔羽賀寺縁起・別本〕へ続、791> ○若狭国遠敷郡国富村

天曆元年未_丁八月下旬、青龍戴宝珠入大海、洪水崩山、其時堂舎神水底淤泥。祠并本尊脇士皆以没水底淤泥。

〔羽賀寺縁起〕へ続、791>

天曆元年未_丁八月下旬、丁四陰迫二陽、青龍出谷入海中、大雨傾盆、山壁埋谷、堂閣翻然悉没泥中、（○中略）然二年_申雲居寺之淨藏一夕境界之中、有人告曰、若狭靈地、其名曰羽賀、山崩没堂閣、廢乎不久、（○中略）藏師来此鑿地、不幾尊容果得泥中。

35 応和三年七月二十八日（963—III—25、2073025）ころ、京都で地震あり（?）。
〔村上天皇御記、補注〕へ続々、5>

廿八日戊寅、此日、修臨時仁王会、依禳旱災及天変地震也。○「智証大師記所載御記抄」

36 康保元年（964）地震頻発する。

〔応和四年革命勘文〕へ続、291>

応和四年七月十日癸未云々、命延光朝臣、仰左大臣云、司会作改年号詔書、其事趣、朕以不徳久君臨天下、而今歳天変地震災変相頻、須施徳政改年号以攘災殃、即可載大赦天下。

37 康保三年四月十三日（966—V—11、2074015）京都賀茂神社鳴動する。
〔賀茂注進雜記〕へ続々、1>

村上天皇康保三年四月十三日賀茂社鳴動の事、社家は奏す。同時に内裏の宜陽殿鳴ければ公卿僉議ありて御慎重かるべしとて上七社に幣帛使を立らる。

38 康和四年五月二日（967—VI—17、2074417）、京都地震あり？

〔東寺長者補任卷第一〕へ続々、2>

五月二日於仁寿殿令律師寛静修孔雀經法、限七箇日、伴僧廿口、依物恠地震也。

39 天延元年九月二十七日（973—X—30、2076744）、京都に強い地震あり（I—128）

〔皇年代略記〕へ正、32>

元年（○天延）癸酉十二月廿日改元、依天変地震也。

〔改元鳥兎記〕へ続、279>

天祿四_癸十二月廿八日（イ廿日）。改為天延。（依天変地震也）

40 貞元元年六月十八日（976—III—22、2077740）、山城、近江に大地震あり、諸寺、国府庁屋舎等に被害あり。（I—128）
〔皇年代略記〕へ正、32>

元年（○貞元）丙子七月十三日改元、依天変地震也、或依日蝕云々。又火事地震云々。

〔○「皇代略記」〕△続、82▽、同旨の文あり

〔如是院年代記〕△正、460▽

貞元元、七月十二日改元、正月十三日虹貫日、五月十一日内裏火、六月震。

〔改元部類〕△続、281▽

天延四年七月十三日戊寅、天晴、是日於八省院大極殿。被修臨時御読経之事。依去六月十八日大地震所被行也。

〔神皇正統録〕△続、851▽

同年六月十八日、未曾有大地震不絶。

〔仁寿鏡〕△続、853▽

貞元一、（○中略）、六月十八日、大地震。

〔十三代要略〕△続、854▽

六月十八日、地大震。

41

寛和元年（985）河内に地震あり、小松寺の講堂崩壊する。

〔河内国小松寺縁起〕△続、801▽ ○交野郡交野町

寛和元年中講堂為大地震崩了。

42

一条天皇の時（986-1011）、京都に地震あり。

〔続古事談一〕△正、487▽

一条院ノ御時大地震ノアリケル日。冷泉院オホセラレケルハ、池ノ中島ニ幄ヲタテヨ、オハシマスベキ事アリト仰セラレケレバ、人心エズ思ナガラタテ、御簾カケ筵シキタルニ、午時計リニワタリ給ニケリ、其後未時バカリニ大地震アリテ、ヨソク出ル人ハウチヒシガレケリ、人々此事ヲ問タテマツリケレバ、去夜ノ夢ニ九条大臣来テ、明日ノ未時ニ地震アルベシ、中島ニオハシマセト

ツゲツルナリトゾ仰セラレケル、聞人涙ヲナガシケリ、彼大臣ノ靈ツキノヒテマモリタテマツルナルベシ。

43

永祚元年（989）、地震により改元される。

〔皇代略記〕△続、82▽

永祚一、元年己丑、八月八日丙辰改元、依天変彗星地震也。

（○「改元鳥兔記」）△続、279▽同文あり

○都司注、相当する地震見当らず。

44

長保四年（1002）、京都地震あり。

〔神皇正統録中〕△続、851▽

同（○長保）四年壬寅歳花山院書写山ノ性空上人ノ庵室ニ幸給。延源阿闍梨ニ勅而性空ノ像ヲ図シ并行業事等ヲ記サル。于時山動地震上皇并供奉人等大ニ驚、皆性空ヲ畏、性空曰、敢以恐事勿、爰凶像成就之處、又山川大動震。上皇地ヲ下給テ性空ヲ礼シ給。

45

寛弘元年（1004）、地震により改元される。

〔皇年代略記〕△正、32▽

元年（○寛弘）甲辰七月廿日壬寅改元。依天変地震也。

（○「皇代略記」）△続、82▽、〔改元鳥兔記〕△続、279▽に同文あり

46

寛仁四年（1020）、富士山噴火続く。

〔さらしな日記〕△正、328▽（○「たひらぎ」とする本もあり）山のいたゞきのすこしたいらぎたるより、畑は立のぼる、夕暮は火のもえたつも見ゆ。（○清見閑）富士の高根にけぶりをのぞめば、蠟雪宿して雲ひとりむすび（○下略）

47 長久二年十二月二十二日 (1042-I-22, 2101664) 、武蔵に大地震あり、仏閣転倒する。(I-143)

〔武蔵国浅草寺縁起〕へ続、805>
人王六十九代。後朱雀院御宇長久二年辛巳十二月廿二日大地震動して仏閣顛倒せり、人たやすく修造する事なし、陳地芘蕪にして靈場寂々たり、爰に寂円阿闍と云聖修行の次に此寺に参詣して靈場を拝し奉るに、鳳の豊早くくづれり、苜蓿砌に繞、仏地空しくあれて荆棘庭に生たり、進で他力を催しなむとすれば、亦財産を草庵の中に儲事なし、然共材木を隣境の山頭に尋、葺萱を当州の野外に調、去永承五六兩年 (○1050, 1051) に建立供養して宿願を果し給ふ。

48 康平元年十一月二十八日 (1058-III-22, 2107842) 、伊勢に地震あり。(I-144)

〔伊勢公卿勅使雜例〕へ続、15>
康平元年十一月廿八日乙未、参議藤経季、宣命、天変地震、大内記正家草。

49 治暦元年四月十四日 (1065-V-27, 2110190) 、伊勢に地震あり?

〔伊勢公卿勅使雜例〕へ続、15>
康平八年四月十四日癸卯、参議右大源隆俊、宣命、三合天変地震御楽、明年以後御慎。

50 治暦二年三月二十八日 (1066-V-1, 2110529) 、河内誉田山陵鳴動する。

〔誉田八幡縁起〕へ続、67> ○南河内郡
治暦二年三月廿八日、誉田山鳴動して光をはなす由、八幡護国寺

より注進す。

51 延久二年十月十日 (1070-III-1, 2112204) 、山城、大和に大地震あり。(I-145)

〔東寺王代記〕へ続、856>
十月廿日、大地震。

52 延久二年十一月二十日 (1071-I-1, 2112235) 、京都に地震あり。

〔諸法要略抄〕へ続、724>
後三条院御宇延久二年十一月二十日、丑剋地震及数剋、山洛無不恐怖。

○都司注。前項の地震の月次を誤ったものであろうか。

53 承保元年六月二十八日 (1074-III-30, 2113541) 、伊勢に地震あり?

〔伊勢公卿勅使雜例〕へ続、15>
延久六年六月廿八日甲午、参議左大辨兼皇太后宮大夫勘解由長官源経信、宣命、三合陽九天変地震。左中辨実政草、宸筆、御草。

54 承保二年三月八日 (1075-IV-2, 2113787) 、伊勢に地震あり?

〔伊勢公卿勅使雜例〕へ続、15>
承保二年三月八日庚子、有行幸、別当権中納言兼右衛督藤実季、宣命。天変地震御慎。

55 応徳三年十一月七日 (1086-III-21, 2118068) 、伊勢に地震あり?

〔伊勢公卿勅使雜例〕へ続、15>

同（○応徳）三年十一月七日辛酉、権中納言兼侍從源雅実、宣命。星変地妖、宸筆、御草。

56 嘉保二年十月十八日（1095-M-25, 2121327）、伊勢に地震あり。○（1-152）

〔伊勢公卿勅使雜例〕

嘉保二年十月十八日庚辰、権中納言兼右近大将源雅実。宣命、御台平愈事。御慎天変地震。宸筆、権中納言匡房卿。大内記藤俊経。

57 永長元年十一月二十四日（1096-M-17, 2121717）、畿内、阿波大地震、伊勢、駿河は津波におそわれる。（1-153）

〔皇代記〕△正、31△

嘉保三年十二月廿一日改元、依天変地震也。（○〔皇年代略記〕△正、32△、〔鳩嶺年代記〕△正、453△、同文あり）

〔改元部類〕△統、280△

去廿四日連夜連日小地震、世以恐懼、十二月十七日癸酉、此夕左大臣以下参仗座、定申改元事、依地震云々。

58 承徳元年（1097）、京都に地震あり。

〔皇代略記〕△統、82△

元年（○承徳）丁丑、十一月廿一日辛酉改元、依天変地震也。

○〔改元鳥兔記〕△統、279△〔皇年代略記〕△統、32△〔皇代記〕△正、31△、〔十三代要略〕△統、854△同旨の文あり）

〔立川寺年代記〕△統、859△ ○越中国中新川郡上市町カ。

承徳元年丁丑大地震動、或面身悪瘡出来或悩、人民多死。

○都司注。（1-158）所載の地震とは別の地震であろう。

59 康和元年一月二十四日（1099-II-22, 2122514）、畿内地震強

く、家屋被害あり。（1-158）

〔皇代略記〕△統、82△

元年（○康和）己卯八月廿九日戊戌改元、依疾疫。

○〔改元鳥兔記〕△統、279△同文あり）

〔十三代要略〕△統、854△

承徳三年八月二十八日、改元依地地震疾疫也。（○中略）二十四日（○正月）権中納言俊明卿為勅使参向太神宮。今日卯刻地震。

60 康和三年十月十日（1101-M-9, 2123504）、伊勢に地変あり。

〔伊勢公卿勅使雜例〕△統、15△

康和三年十月十日丁酉、行幸、大納言民部卿太皇太后大夫源俊明宣命、天変地妖本官恠異、大内記兼衡。

61 康和四年十月二日（1102-M-20, 2123880）、河内誉田山陵鳴

動する。

〔誉田八幡縁起〕△統、67△ ○南河内郡

又康和四年十月二日、嘉承元年三月廿三日にもさきのごとく鳴動放光す。

62 長治二年六月二日（1105-M-21, 2124854）、北地に赤い雪が

降る。

〔神皇正統録中〕△統、851△

長治二年乙酉六月二日北地 紅ノ雪降事五寸。

63 長治二年十一月十七日（1106-I-1, 2125018）、男山など鳴

動する。（1-166）

〔宮寺縁事抄〕△正、14△ ○石清水八幡文書。

長治二年十一月

十七日戌時。男山鳴動、又神功皇后成務天皇兩山陵鳴動事。

- 64 嘉承元年一月十二日 (1106-II-24, 2125072) 、京都二度地震あり。(1-167)

〔諸道勘文〕へ正、462 >

一、同十二日乙巳刻震有音。未刻又動。

- 65 嘉承元年三月二十三日 (1106-V-5, 2125142) 、河内菅田山陵鳴動する。

〔菅田八幡縁起〕へ統、67 > ○南河内郡

又康和四年十月二日、嘉承元年三月廿三日にも、さきのごとく鳴動放光す。

- 66 嘉承二年二月十一日 (1107-III-14, 2125455) 、京都、伊勢地震あり。(1-167)

〔伊勢公卿勅使雜例〕へ統、15 >

嘉承二年二月十一日戊辰。宣命、辞別。今日卯刻地震事。大内記兼衡。

- 67 嘉承三年四月七日 (1107-V-8, 2125510) 、京都で強い地震あり。(1-167)

〔十三代要略〕へ統、854 >

四月七日、大地震。

- 68 天仁二年三月八日 (1109-IV-16, 2126219) 、伊勢に地変あり？

〔伊勢公卿勅使雜例〕へ統、15 >

天仁二年三月八日、權中納言兼按察使藤宗通、宣命、天変地妖恠異、大内記敦充、宸筆、敦宗朝、大学頭。

- 69 永久四年六月二十九日 (1116-III-16, 2128898) 、大和多武峯北山崩壊する。

〔多武峯略記下〕へ正、436 >

永久四年六月廿九日夜、以大雨故、北山崩破壊件堂。其跡者聖靈院西。法華堂良也。

- 70 保安三年十二月六日 (1122-III-13, 2131208) 、伊勢に地変あり？

〔伊勢公卿勅使雜例〕へ正、15 >

同年十二月六日辛卯、参議右兵衛督藤実行、宸筆、為隆朝臣、蔵人頭左中辨、宣命。天変地妖恠異夢想御不予平愈報賽、大内記藤宗光。

- 71 康治二年十二月九日 (1144-I-22, 2138918) 、伊勢に地震あり。

〔伊勢公卿勅使雜例〕へ正、15 >

康治二年十二月九日、權中納言皇太后宮權大夫侍從藤成通。宣命。天変地震甲子。大内記長光。宸筆、参議左大辨頭業卿。

○都司注、「甲子」を地震の起った日と解すると、十一月十二日ということになり、「西暦日付は、(1143-III-26, 2138891) となる。

- 72 久寿年間、(1154~1156) 京都の宮中殿閣大震する。

〔源翁禪師伝〕へ統、227 >

久寿間。一夕宮中之宴。月卿雲客皆列侍。管絃数奏。時及深更、殿閣大震。銀燭遽滅、帝座有 姫玉澡前、放光於身、大照殿階、帝於是不予、安倍易説卜之曰、是玉藻所為也、忽化狐逃東国。

73 保元元年四月二十七日 (1156-V-25, 2143425)・京都地震あり。
〔改元部類〕へ続、283〱「山槐記」引用文中。

同月廿七日、天陰風、未剋地震。

74 保元三年三月十九日 (1158-IV-26, 2144126)・伊勢に地震あり？
〔伊勢公卿勅使雜例〕へ続、15〱

保元三年三月十九日乙卯、式部大輔、權大納言藤経宗、宸筆、永範朝臣、宣命、天変地妖、大内記信重。

75 応保元年四月二十二日 (1161-V-25, 2145251)・伊勢に地震あり？
〔伊勢公卿勅使雜例〕へ続、15〱

応保元年四月廿二日甲子、別当参議左衛門督平清盛、宸筆、範兼朝臣、宣命、天変地妖、少内記能資、上卿、左大臣。

76 長寛二年五月八日 (1164-VI-6, 2146359)・京都地震あり？
〔年中行事秘抄〕へ正、86〱

長寛二年五月八日、今日依地震御祈可被立廿二社奉幣使。

77 永万元年六月七日 (1165-VII-23, 2146771)・京都蓮花院西砌醴泉湧く。
〔立川寺年代記〕へ続、859〱〱「立川寺」は越中か？

永万元年乙酉六月七日蓮花院西砌醴泉涌。今尚甘井アリ。

78 仁安三年十二月二十九日 (1169-II-4, 2148063)・伊勢に地震あり？

震あり？

〔伊勢公卿勅使雜例〕

参議左大 源雅頼、宣命、内宮火事、辞別、地震、作者左中弁俊經、無宸筆宣命并神宝等。

79 仁安四年一月二十六日 (1169-III-3, 2148090)・伊勢に地震あり？
〔伊勢公卿勅使雜例〕へ続、15〱

同四年正月廿六日、別当權中納言兼右衛門督平時忠、宣命、火事并造宮子細、辞別、御慎地震。大内記光範草也、宸筆、永範朝臣。

80 承安四年十一月十一日 (1174-III-13, 2150201)・伊勢に地震あり？
〔伊勢公卿勅使雜例〕へ続、15〱

承安四年十一月十一日甲午、權大納言藤実国、宸筆、永範卿、宣命、今年御慎事、天変地震事、上卿、左大臣経〔衍カ〕

81 治承三年十一月七日 (1179-III-14, 2152028)・京都に強き地震あり。(I-185)
〔保暦間記〕へ正、458〱

十一月七日、戊刻。大地震動ス。時ヲ遷テ震ヘリ。同八日ノ早且ニ陰陽頭泰親院ノ御所ヘ参リテ申ケルハ、夜前ノ地動ハ重慎也、唯今ニ世モ失候ハンズルヤトテ、ハラハラト泣ク、穴ケシカラズヤ。

82 元暦元年一月二十日 (1184-III-11, 2153577)・常陸鹿島社震動する。(I-189)
〔神皇正統録ト〕へ続、851〱〱(〱I-189)の「吉川本吾妻鏡」

とほほ同文)

83 元暦元年四月(1184-V-19~、2153646)、京都に強い地震あり。

〔皇代略記〕△続、83>
元暦元、四、大地震。

84 文治元年七月九日(1185-III-13, 2154097)、山城、近江、美濃、伯耆諸国大地震。京都に家屋被害、京都、近江に地変あり、(1-190)

〔皇代記〕△正、31>

元暦二年八月十四日改元、依去月九日大地震也。

○〔皇年代略記〕△正、32>、〔元号字抄〕△続、278>、〔元秘抄〕△続、278>に同旨の文あり)

〔仁和寺御伝〕△正、67> ○京都

元暦二年七月十日辛卯、為地震御祈於六条殿。一字金輪御修法御勤任、伴僧八口、八月十九日己巳、於院御所被修孔雀經法、為地震變異御祈也、伴僧廿口。

〔天台座主記〕△続、100>

七月九日大地震山上坂下堂舎塔廟或傾危或顛倒不可勝計。

十一月自朔日為義經謀反御祈於桂林房被修四天王法。

同廿三日於食堂被行灌頂。

同廿五日於中堂被行舍利会是惣持院真言灌頂兩堂廻廊等顛倒故也
文治三年丁未四月廿九日於惣持院被行舍利会廻廊等漸々修造雖未茸
松被行法会。

〔表白集〕△続、825>

近年以来国大乱世不静、就中去年初当之候、大地震動之間、累代之御願多破滅、嚴重之伽藍悉顛倒。然而未能造管空以過年月、

△〔醍醐寺雜事記〕△続、923>(1-200)

十九日(○八月)己酉、院御祈孔雀經御修行法被始行、大阿闍梨仁和寺宮、護摩壇座主御房、以僧正之身為伴僧之事未曾有也。

依□院宣參勤之、伴僧廿人、内上番僧云々。此御祈彼地震天変等之故也。□諸社□□有近日之由議定了。然御卜云。不可有諸社行□□□其行幸有此地震云々。仍行幸止了。

△〔吾妻鏡〕(1-196) ○建久二年十月一日の条。

これ法住寺殿は、義仲 逆の時悪徒乱入し、また文治元年の地震にことごとく頼れ傾くの間、関東の御沙汰として修理を加へられその牛屋を立てられんがためなり。

〔皇代略記〕△続、82>

同(○元暦元)七月又大地震。希有大動也。

85 文治元年八月二十八日(1185-K-30, 2154145)、京都に地震あり。

〔東大寺統要録、供養篇〕△続々、11>

廿八日戊寅晴三宝下吉帰忌、未尅雨灑申剋、大雨入夜上洛下地再震、南部不然歟。

86 文治三年三月十八日(1187-V-5, 2154727)、京都に地震あり。

〔東宝記〕△続々、12> ○京都東寺の文書。

一、鐘楼、四面各三間。

或記云、文治三年三月十八日、鐘楼柱立日、夜依大地震、顛倒之間、執行嚴慶十方人々勸進之、致修造、大工寺家修理番匠安次也。七月三日棟上。

87 建久六年三月十二日(1195-W-30, 2157644)、奈良に強い地震

震あり。

〔東大寺統要録、供養編〕へ続々、111

十二日 酉晴蜜日曜。甘露三宝吉、未剋大地震動。

○都司注。(1-213)に同一日の鎌倉の地震記事があるが、時刻が合わず、これとは全く別の地震であろう。

88 建保元年(1213)地震により改元される。(1-220~222)

〔皇年代略記〕へ正、32

元年(○建保)癸酉十二月六日改元、天変地震御慎。

○〔元抄抄〕へ続、278、〔改元鳥兔記〕へ続、279に同旨の文あり)

○都司注、この年は改元日までに鎌倉で八度、京都で三度の地震あり。

89 貞応二年(1223)しろ、富士噴火続く。

〔海道記〕へ正、330

富士の高根にけぶりをのぞめば、暎雪宿して雲ひとりむすび。(○下略)

90 元仁元年(1224)、地震により改元される。

〔皇年代略記〕へ正、32

元年(○元仁)甲申十一月廿日改元、依天変地盤。

(○〔皇代略記〕へ続、82に同旨の文あり)

○都司注。この年は改元日までに鎌倉で六度。京都で一度、地震あり。

91 安貞元年五月二十九日(1227-III-21, 2169414)、石清水八幡

宮鳴動する。

〔宮寺縁事抄〕へ正、14

○石清水八幡の文書
嘉祿三年五月廿九日。長時御山鳴動。

92 貞永元年(1232)地妖のため改元される。

〔皇代略記〕へ続、82

元年(○貞永)壬辰、四月二日改元、依天変地妖風雨不節飢饉也。
(○〔皇年代略記〕へ正、32に同文あり)

93 文暦元年(1234)地震のため改元される。

〔皇代略記〕へ続、82

元年(○文暦)甲午、十一月五日改元、依諒闇重暈也。但天変地妖云。(〔皇年代略記〕へ正、32に同文あり)

〔元秘抄三〕へ続、278
文暦。天変地震。

○都司注。同年九月十六日の地震(1-244)によるか。

94 嘉禎元年(1235)地震により改元される。

〔皇代略記〕へ続、82

元年乙未、九月十九日改元、依天変地震也。
(○〔元秘抄〕へ続、278に同文あり)

○都司注 同年九月一日の地震によるか(1-248)

95 嘉禎元年十月二十日(1235-III-8, 2172476)、京都に地震あり。(1-248)

〔皇代略記〕へ続、82

嘉禎元十廿、御即位の間地震。

96 仁治元年(1240)、地震のため改元される。

〔皇代記〕△正、31>

延応二年七月十六日改元。依替星地震也。

〔皇年代略記〕△正、32>

元年（○仁治）庚子七月十六日改元。依替星災旱地變也。

〔皇代略記〕△統、82>

元年庚子、七月十六日改元、依替旱災地震也。

○都司注 二月二十二日の鎌倉の地震（I-253）によるか。

97 仁治三年二月十八日（1242-III-27, 2174777）、京都で太陽赤

く光なく見える。（I-255）

〔皇年代略記〕△正、32>

二、十八、日赤無光、薄蝕云々。

98 寛元二年七月一日（1244-III-13, 2175647）、京都で地震あり

（I-256）

〔皇年代略記〕△正、32>

寛元二、七、二、地震。

99 正嘉元年八月二十三日（1257-X-9, 2180452）、鎌倉大地震

あり、神社仏閣転倒す。〔I-269〕

〔関東評定衆伝I〕△正、49>

正嘉元年丁巳、八月廿三日、大地震。

〔註画讃I〕△統、220> ○鎌倉

正嘉元年丁巳八月二十三日戌亥刻大地震。

〔蓮公大師年譜〕△統、221>

八二三大大地震。

100 正元元年（1259）、地震のため改元されぬ。

〔皇年代略記〕△正、32>

元年（○正元）己未三月廿六日改元、依疾疫飢饉地震等。

（○〔皇代略記〕△統、82>同文）

○都司注 相応する地震見当らず。

101 正元元年五月二日（1259-VI-1, 2181052）、京都地震あり。

〔仁王経修法問答〕△統、739>

第三日初夜時終地震有之。自梶井宮内々被召尋晴繼、彼請文云。

一昨日亥剋許小地震候キ。誠吉動天下可立直候。被天子吉大臣

可受福之由見候也。内々以此旨可令申入給候。恐々謹言。

五月四日。大舍人頭晴繼

五月三日、於弘御所、去夜地震吉瑞也。

102 弘安四年四月二十八日（1281-V-24, 2189080）、大和金剛峰

寺神殿鳴動す。

〔正応六年大政官牒〕△統、76>

同廿八日夜、神殿鳴動、宛如地震、奇光赫奕、殆疑天變、明神出

御瑞相也。

103 永仁元年一月一日（1293-II-15, 2193365）、京都で強い地震

あり。（I-282）

〔吉口伝〕△統、310> ○吉田隆長筆、京都

正応六年正月一日口記云（○中略）、小朝拝了、予仰令奉仕節

会御装束、右府会着仗給座。念可奉仕之由被仰、予出陣仰内弁、

此間有大地震。（○下略）

104 永仁元年四月十三日（1293-V-27, 2193466）、鎌倉大地震あり、死者二万人を超えぬ。（I-282）

〔皇代略記〕へ続、82へ

元年（○永仁）癸巳、八月五日改元、依天変地震炎旱也。

〔保曆間記〕へ正、458へ ○次文は京都の事情を述べている。

彼入道嫡子平佐衛門宗綱ハ忠アル仁ニテ、父ガ悪行ヲ歎テ此事ヲ貞時ニ忍ヤカニ申タリ、此上ハトテ平左衛門入道果園父子ヲバ、正応六年（○永仁元年）四月廿二日、被誅畢、去十三日寅尅大地震動有。如此瑞相ニヤト覺ユ。

〔野守鏡下〕へ正、484へ

又関東は地震動して神堂はたふれやけたりしに、律院はつゝがなかりけることふしぎにおぼえはべれ、禅宗の諸国に流布する事は関東に建長寺をたてられしゆへ也、是まことに神慮にかなはずりけるやらん。建長、正嘉、正元うちつゞき人のやみうせ、飢饉せし事おびたゞしかりし事ぞかし。

〔神明鏡〕へ続、852へ

正応六年四月十三日大地震。鎌倉中ノ山々崩。打殺サル者二千五百余人ト云リ。

105 嘉元三年四月六日（1305-V-8, 2197829）、相模に強き地震あり。（1-286）

〔北条九代記下〕へ続、855へ

四月六日、大地震、占文云、大人之慎云々。

106 嘉元三年四月十日（1305-V-12, 2197833）、相模に地震あり

（1-286）

〔北条九代記下〕へ続、855へ

十日、又地震。

107 徳治三年一月二十六日（1308-II-26, 2198853）、京都に地震

あり。

〔東宝記四〕へ続々、12へ ○京都東寺文書

後宇多院宸筆御記云。暨徳治三年春正月廿六日、排束寺灌頂院、任延喜嘉躅、屈八十余僧、受伝法灌頂阿闍梨職位於前大僧正、加行間、於当寺、励精進力、靈瑞屢示冥応掲焉、当日入壇時尅、地震動天、現光耀、自爾以降、弥励修練、守高祖遺訓、堅持顯密二戒云々。

108 正和元年（1322）地震により改元される。

〔皇年代略記〕へ正、32へ

元年（○正和）壬子三月廿日改元、天変地震。

（○〔皇代略記〕へ続、82へに同文あり）

○都司注 相応する地震見当らず。

109 正和元年四月十二日（1312-V-26, 2200404）、相模の海水赤

色となる。

〔海蔵和尚紀年録〕へ続、232へ

師三十五歳、春、師在建長寺（○中略）、夏四月十二、相之海水

変赤。

110 文保元年一月三日（1317-II-22, 2202137）、京都に大地震あり、

家屋倒潰、死者あり、余震五月まで続へ。（1-289）

〔皇代略記〕へ続、82へ

元年（○文保）丁巳、二月三日改元、依大地震也、（○〔皇代記〕

へ正、32へ、〔皇年代略記〕へ正、32へ同文あり）

〔神明鏡下〕へ続、852へ

同（○正和）六年正月一日大地震、正月ヨリ五月マデ数十度、京

白河堂舎民屋悉崩倒ス。

○都司注、一日の大地震は前震であらうか。

〔東寺長者補任四〕△続々、2△

正月三日大地震、四日又同、今夜東寺塔九輪折傾、灌頂院破損。

111 嘉暦元年六月十五日 (1325—Ⅷ—12, 2205230) 、京都に山崩

れあり。

〔神明鏡下〕△続、852△

正中二年六月二十五日ノ亥時。雷電シテ俄ニ山門ノ無動寺山崩。

坊舎卅余宇打埋。人民多打殺、白河京中ノ民屋悉流。希代珍事也。

112 嘉暦元年 (1326) 地震により改元される。

〔皇代記〕△正、31△

正中三年四月廿六日、依疾疫流行并去年大地震改元。

○〔皇年代略記〕△正、32△、〔元秘抄三〕△続、278△、〔皇代略記〕△続、82△同旨の文あり。

○都司注、正中二年十月二十一日 (1—294) の地震をさすか。

113 建武二年四月二十日 (1335—Ⅴ—21, 2208799) 、京都に地震あ

り。(1—298)

〔匡遠記〕△続々、5△ ○左大史小槻匡遠筆。

廿日、晴、今日午終刻有地震。

○都司注、「続々群書類従」の編者は建武二年五月の日記の断簡と推定してゐる。

114 康永元年 (1342) 地妖により改元される。

〔皇年代略記〕△正、32△

曆応四年四月廿七日、依病事天変地妖改元。

〔皇代略記〕△続、83△

元年壬午、四月廿八日改元、依天変地震疾疫也。

○〔改元鳥兔記〕△続、279△同旨の文あり

○都司注、対応する地妖、地震は見当らない。

115 観応元年五月二十三日 (1350—Ⅷ—6, 2214324) 、京都に強

地震あり、余震六月に及ぶ。

〔浄修坊雑日記〕△続、925△ ○〔浄修坊〕は京都醍醐寺支院カ。

観応元年五月廿三日酉初大地震、近年更無之以外也云々。

〔皇代略記〕△続、82△

観応元五廿九寅刻地震、午刻地震両度六月廿二日夜亥刻子刻夜半合三度。七月二日申刻地震。亥刻地震。戌刻將軍塚鳴動。

116 貞治元年 (1362) 地震により改元される。

〔皇代略記〕△続、82△

元年 (○貞治) 壬寅。九月廿三日改元。依兵革地妖也。

〔皇年代略記〕△正、32△

元年壬寅九月廿三日改元、依兵革流病天変地震也。

○都司注、前年六月二十一日、二十四日、七月四日、同年五月十七日などにそれぞれ大地震あり。(1—325～336)

117 応安元年六月二十四日 (1368—Ⅷ—17, 2220910) 、河内に地震

あり、西琳寺に被害あり。

〔西琳寺流記〕△続、801△ ○南河内郡古市町

去応安元年六月廿四日大地震、回廊顛倒。同年修理、然而東西二方猶闕如也。(○中略) 一、鎮守并拝殿。(○中略) 同拝殿者応安

元年地震時顛倒然永和四年 (01378) 緇素合力造宮云々。

○都司注、「緇素」とは「僧侶もそうでない人も」。

丁亥正月五日地震。

118 応安元年八月三十日 (1368—K—21, 2220976)・京都に地震あり、東寺に被害あり。

123 応永二十年二月五日 (1413—III—16, 2237222)・京都に地震あり。

〔東寺王代記〕△続、856△

〔満濟准后日記〕

応安元、元年八月卅日、東寺講堂四角立仮柱、依大地震相続有顛倒。同九月廿二日、將軍家移住于新熊野、顛倒之怖畏故也。即主上臨幸。

五日、乙卯天晴、地震小動。

119 康応元年三月十八日 (1389—IV—22, 2228494)・京都に強い地震あり。

124 応永二十年九月一日 (1413—X—4, 2237424)・京都に地震あり。

〔東寺王代記〕△続、856△

三月十八日丑剋、大地震。

〔満濟准后日記〕
九月大壬戌、一日、丁丑天陰、地震。小動水神動。

120 応永元年十一月十六日 (1394—VII—17, 2230559)・山城男山鳴動する。

125 応永二十年十一月十五日 (1413—XII—17, 2237498)・京都に強い地震あり。(1—363)

〔東寺王代記〕△続、856△
十二月二日、於男山仁王經始行、依去十六日当社鳴動也。

〔満濟准后日記〕
十五日、辛卯、天晴、卯刻大地震、辰刻マテ五六ケ度鳴動。亥刻又鳴動□□□。

121 応永十三年一月十一日 (1406—II—8, 2234629)・京都に地震あり。

126 応永二十年十一月十七日 (1413—XII—19, 2237500)・京都に地震あり。

〔醍醐雜抄〕△続、925△
十一日、亥刻地震。

〔満濟准后日記〕
十七日、癸巳、天晴。亥刻地震。小。

122 応永十四年一月五日 (1407—II—21, 2235007)・京都で強い地震あり。(1—358)

〔常光国師行実〕△続、239△
○常光国師は山城西山の保宗院に住す。

十二月大。乙丑。二日丁未天晴。参下御所、天変地妖御祈事、可相觸護持僧中之由被仰出了。
五日、庚戌天晴、天変地妖御祈自今日始行。

127 応永二十年十二月九日 (1414—I—9, 2237521)・京都に地震あり。

〔満濟准后日記〕
九日、甲寅天晴、今朝小地動。小吉動云々、自去月十五日大略毎日也。

128 応永二十一年一月十三日 (1414-II-12, 2237555) ・京都に地震あり。
〔満濟准后日記〕

十三日、戊子天晴、今曉地震、辰未刻重鳴動、入寺、宝池院同道、坊官三人、侍二人中童子一人供奉、地動。

129 応永二十一年一月十四日 (1414-II-13, 2237556) ・京都に地震あり。
〔満濟准后日記〕

十四日、己丑天晴、小地震。

130 応永二十一年四月一日 (1414-III-29, 2237631) ・京都に地震あり。
〔満濟准后日記〕

一日、甲辰天晴 (○中略)、子未刻ヨリ降雨、少動、天主動、吉動也。

131 応永二十一年七月十五日 (1414-III-9, 2237733) ・京都に地震あり。
〔満濟准后日記〕

十五日、丙戌、降雨、卯半刻地震。

132 応永二十一年十二月二十八日 (1415-III-16, 2237924) ・京都に地震あり。

〔満濟准后日記〕
廿八日、丁酉、天晴、小地震。

133 応永二十二年三月十八日 (1415-IV-6, 2238003) ・京都に地震あり。
〔満濟准后日記〕

十八日、丙辰、降雨、小地動。

134 応永二十二年四月五日 (1415-V-22, 2238019) ・京都に地震あり。
〔満濟准后日記〕

五日、壬申、天晴、鳴動、午刻地震云々、如雷鳴。

135 応永二十二年四月二十一日 (1415-VI-7, 2238035) ・京都に二度地震あり。
〔満濟准后日記〕

廿一日、戊子、天晴、巳未刻小動、午初刻又小動。

136 応永二十二年八月二十七日 (1415-VII-9, 2238159) ・京都に地震あり。
〔満濟准后日記〕

廿七日、壬辰、天晴、今曉卯半刻敷地震。如智論勘者、金翅鳥動不快也。

137 応永二十二年十月二十七日 (1416-VIII-7, 2238218) ・京都に地震あり。
〔満濟准后日記〕

廿七日、辛卯天晴、寅未刻地動、以智論勘之、弓宿火神動也、凡

不宜敷。

138 応永二十三年四月二日 (1416-V-8, 2238371) 京都に地震あり。

〔満濟准后日記〕

二日、甲子、天晴、地震、鳴動、以智論文勘之。誓宿天王動、吉動敷、但陰陽家以現凶宿勘進之、定相違敷。

139 応永二十四年三月十五日 (1417-W-11, 2238709) 京都に地震あり。

〔満濟准后日記〕

十五日、壬寅、天晴、卯刻地震、火神動敷、重可尋之。

140 応永二十四年七月二十三日 (1417-K-13, 2238864) 比叡山で怪異事あり。

〔満濟准后日記〕

廿三日、丁丑天晴、降雨、依比叡山石破怪異事。

141 応永二十五年二月二十日 (1418-W-5, 2239068) 京都で太陽・月、変色して見える。

〔満濟准后日記〕

廿日、辛丑天晴、夕日事外赤色、諸人奇異□□□語云、先規不快云々。但不知□□□今夜月又変色、頗如蝕云々、日□□□凡希代事驚入也。

廿三日、甲辰天晴、今暁月又変色、剩没ニテ不見□□、水本僧正以下五六人見□□。

142 応永二十五年八月十六日 (1418-K-25, 2239241) 京都に地

震あり。

〔看聞御記〕

十六日、晴、巳刻有小地震、火神動也、今暁も有鳴動云々。予不聞之不審。

143 応永二十六年五月九日 (1419-W-11, 2239500) 京都に地震あり。(1-365)

〔満濟准后日記〕○五月十四日の条。

先夜九日、地震御祈云々、予依老尼所勞辭退申。

144 応永二十六年六月十五日 (1419-W-16, 2239485) 美濃南宮振動、貴布祢山崩れるとの注進あり。

〔満濟准后日記〕○六月二十九日の条。

今月十五日美濃南宮社壇振動由注進云々。貴布祢山崩云々、日時未分明。

○都司注、地変の生じた日時は不明。

145 応永二十六年九月二日 (1419-K-30, 2239611) 京都に地震あり。

〔満濟准后日記〕

二日、甲辰、天晴、今暁少動。

146 応永二十六年十月 (1419-X-28, 2239639) 関東に強い地震あり。(1-365)

〔喜連川判鑑〕ハ続、112 √ ○喜連川氏は関東足利氏の子孫。

七月ヨリ九月迄大洪水十ヶ度、十月大風、大木折レ人屋破損ス、大旱魃、大地震、飢饉。

147 応永二十六年十二月三日 (1419-Ⅻ-28, 2239700)・京都地震あり。
〔満濟准后日記〕

三日、癸酉、天晴、小動、辰初刻、以智論勘見之、火神動歟。

148 応永二十六年十二月四日 (1419-Ⅻ-29, 2239701)・京都地震あり。
〔満濟准后日記〕

四日、甲戌、天晴、小動、巳半刻、龍神動歟、勘見同前。

149 応永二十七年十二月二十四日 (1421-Ⅱ-5, 2240105)・京都地震あり。(1-366)
〔看聞御記〕

廿四日、晴、朝小地震。

150 応永二十八年一月二十八日 (1421-Ⅲ-11, 2240139)・京都地震あり。
〔満濟准后日記〕

廿八日、壬辰、降雨、今晚、寅末刻小地震。

151 応永二十八年六月十一日 (1421-Ⅵ-19, 2240269)・京都地震あり。
〔満濟准后日記〕

十一日、壬寅、天晴、小動、天王動云々。

152 応永二十八年七月十九日 (1421-Ⅶ-26, 2240307)・京都地震あり。(1-367)
〔満濟准后日記〕

十九日、庚辰、大雨、地震、卯時。
廿二日、癸未、天晴、地動御祈愛染王護摩開白。(○以下略)

153 応永二十八年十月四日 (1421-Ⅹ-8, 2240381)・京都地震あり。
〔満濟准后日記〕

四日、甲午、天晴、小動、房通天王道、吉也。

154 応永二十八年十月十六日 (1421-Ⅹ-20, 2240393)・京都地震あり。
〔満濟准后日記〕

十六日、丙午、寅半刻地動、現畢宿、天王動、吉□□房參、不快、但以現為本□勿論歟。

155 応永二十八年十一月二十九日 (1421-Ⅺ-3, 2240406)・將軍塚鳴動する。
〔看聞御記〕

廿九日、晴、今日清水寺塔供養有舞童云々。抑此間將軍塚鳴動、天下有物言云々。

156 応永二十八年十二月三日 (1422-I-5, 2240439)・京都地震あり。(1-367)
〔満濟准后日記〕

三日、壬辰、天晴、今晚鳴動、小神動力云々。

157 応永二十九年三月二十七日 (1422-Ⅲ-27, 2240551)・京都地震あり。
〔満濟准后日記〕

廿七日、甲申、天晴、午初刻小動。

158 応永三十一年六月二十二日 (1424-III-27, 2241373) 、石清水八幡山、北野宝殿震動、鳴動する。

〔看聞御記〕

廿三日、晴、昨日夕立之后、石清水社壇奉取振上薬師堂云々。其時御山震動。(○中略)又聞、昨夜夕立之時分、北野宝殿鳴動、其後光物出南を指て飛云々、御靈八幡へ御飛歟云々。

159 応永三十一年九月二十五日 (1424-X-26, 2241464) 、京都に地震あり。(1-369)

〔満濟准后日記〕

廿五日、晴、申半刻地震、金翅鳥動。在方卿占文口舌九十日内兵革云々。

160 応永三十一年九月二十六日 (1424-X-27, 2241465) 、京都に地震あり。(1-369)

〔満濟准后日記〕

廿六日、晴、今夜丑刻地動、天王動、吉動由在方卿又申入、珍重々々、今夜亥初刻歟天変光物自辰巳未申へ飛、共如琵琶形云々。

161 応永三十二年閏六月十七日 (1425-III-10, 2241752) 、京都に数度の地震あり。

〔満濟准后日記〕

十七日、雷鳴夕立、今晚寅初刻大地動。龍神動。占文趣以外不快。專兵革病事云々。大乱百日中。或不過一年等云々。在方卿注進如此。有盛卿注進天王動也。如法吉動云々。丑刻地震云々。兩人水火相違如何。誠丑刻ナラハ虚宿天王動条勿論也。而ニ寅刻由多分申歟。

予聖天供開白。当寺後夜寅刻。突時。則後夜念誦等聊早速ニ令沙汰処。後夜鐘最中ニ大地震也。然ハ可為寅刻条勿論歟。但就時刻寅初ハ猶可為丑刻由。口伝子細在之。依此義ハ尤可為吉動也。翌日^{十七}。マテモ少動連続。

十八日。晴。自広橋儀同方奉書到来。為地動御所。

廿日。晴。自今日為地動御祈。

162 応永三十二年八月四日 (1425-K-24, 2241797) 、京都に地震あり。(1-371)

〔満濟准后日記〕

四日、晴、午刻地震、天王動 吉動云々。

163 応永三十二年八月七日 (1425-K-27, 2241800) 、京都に地震あり。(1-371)

〔満濟准后日記〕

丑刻地震、龍神動、占文以外不快、六十日中兵革等云々。

164 応永三十二年八月九日 (1425-K-29, 2241802) 、京都に地震あり。

〔満濟准后日記〕

九日、晴、戌初刻地震、天王動、吉動云々。

165 応永三十二年十一月五日 (1425-III-23, 2241887) 、京都に強い地震あり。築垣損傷あり。(1-372)

〔清涼寺縁起〕へ続、789> ○京都嵯峨野

又当寺承仕仙祐といふもの。仏空中にまします事を聞て。平生うたがひを生じていまだ決せざる所に。一百三代称光院御宇応永卅二年乙巳十一月五日に大地震あり。時に仙祐仏前に在あひて本尊

をはたとまもりたてまつるに。遂に尊容すこしも動じ給ふことなし。時に年来のうたがひを散じける。

166 応永三十二年十一月十二日 (1425-Ⅲ-30, 2241894)・京都に地震あり。(1-373)

〔満濟准后日記〕

十二日、晴、小動、帝釈動歟、犄角也。

167 応永三十三年一月十日 (1426-Ⅱ-26, 2241952)・京都に地震あり。

〔満濟准后日記〕

十日、晴、少雨、戌終刻地動、井宿、天王動、吉動云々。

168 応永三十三年八月一日 (1426-Ⅸ-11, 2242149)・京都に地震あり。

〔満濟准后日記〕

一日、晴、地震、小動、天王動、吉動歟。

169 応永三十三年九月二十三日から二十五日まで (1426-Ⅹ-1~3, 242200~02)・摂津多田廟鳴動する。

〔満濟准后日記〕○十月二十九日の条。

去月廿三四五以上三ヶ日之間、多田院御廟鳴動、廿五日八日中二及十ヶ度鳴動由注進有之。

十一月一日 (中略) 次多田院鳴動御祈不動護摩開白。

170 応永三十三年十一月二十四日 (1426-Ⅺ-31, 2242260)・京都に地震、鳴動あり。(1-376)

〔満濟准后日記〕

鳴動、房宿、天王動、吉動歟。

171 応永三十四年五月六日 (1427-V-9, 2242420)・京都に地震あり。

〔満濟准后日記〕

六日、晴、今夕戌初地震 火神動歟。

172 応永三十四年六月二十五日 (1427-Ⅵ-28, 2242469)・京都に地震あり、また二十五日、二十六日にかけて光物多く飛ぶ。

〔満濟准后日記〕

廿五日、朝夕立今今夜亥初刻地震。贅宿。帝尺動歟。但現図如何。追可尋陰陽家也。同時刻歟少時以前也。光物自辰巳方当所横峯辺へ飛渡云々。或ハ炎魔堂ノ後へ落云々。此次ニ諸人申云。此間鎮守清滝宮森ノ上ニ光物連々出現。拜殿預共拜見云々。何ノ光物哉不審。若神火等歟。浄土寺僧正於八幡御祈護摩今晝結願云々。長尾社御宮中御前御供顛倒云々。鳥所行云々。祢宜無沙汰歟。自寅刻初御陵鳴動云々。

二十六日、晴、今夜子刻計歟。如昨夜光物悉地院大杉木本。地ヨリ一二尺計上ニ徘徊云々。希代事也。一昨夕^{廿五日}。光物事今日親見由者共ニ相尋処。以外不同也。灌頂院ニテ見者申様ハ。其夜光物自地藏院東辺飛出テ清涼堂辺へ落云々。大略人魂体也云々。觀心院侍法師於金剛輪院小門前見之分ハ。自大湯屋上辺見付之。八足門ノ上ヲ丑寅方へ飛行。長尾鳥井辺ニテ落様見ト云々。光事外云々。妙法院侍法師於彼院見分ハ。自辰巳方飛出。横峯辺へ飛行様ニ見之。以外高飛云々。菩提寺僧共見之分ハ。西方ヨリ馬勢分計ナル光物菩提寺上ノ山ヲ越へテ行様見ト云々。所詮諸人見様不同也。不審々々。慶円法眼其夜光祐法印坊ニ一宿見之様ハ。入雲云々。天変歟。此光物唯当所ニ限歟。又京辺モ有之歟。追可尋也。

凡当所ニハ常々如此光物飛廻不珍也。但今度ハ諸人如此見之条如何。

173 応永三十四年九月二十四日 (1427-X-23, 2242470)・京都に地震あり。

〔満濟准后日記〕

廿四日、晴、今日地動有声、以智論文勘之、翼宿金翅鳥動歟、占文不快也、未終動也。

174 応永三十四年十一月十三日 (1427-XII-10, 2242604)・摂津多田廟鳴動する。(1-378)

〔満濟准后日記〕

十四日、晴、今朝以松田対馬守被仰出様、昨日多田院御廟及両度鳴動。

(○十二月)十三日、晴、今日奉行松田対馬守以書状教源法橋方へ申、多田院御廟鳴動御祈結願事可為来十九日由方々へ可被触云々。

十九日、晴、多田院御廟鳴動御祈今晝結願。

175 永享元年三月二十一日 (1429-V-3, 2243114)・京都に地震あり。

〔満濟准后日記〕

廿一日、晴、今夜子終地震、天王動、吉動云々。

176 永享元年十月八日 (1429-X-13, 2243308)・京都に地震あり。

〔満濟准后日記〕

八日、晴、戌初地動、天土動、吉動云々、珍重々々。

177 永享元年十一月十七日 (1429-XII-22, 2243347)・京都地震あり?

〔満濟准后日記〕

十七日、雨、今夕酉終鳴動、非常地震歟、電光在之、若雷鳴、或光物在之、入雲云々、或雷起云々、種々説不同。

178 永享元年十一月二十四日 (1429-XII-29, 2243354)・京都無動寺境内に泉湧く。

〔満濟准后日記〕○永享二年一月二日の条。

去年十一月廿四日無動寺内陣大威徳ノ後ニ俄ニ小水涌出事有之。

179 永享二年一月二日 (1430-I-4, 2243391)・京都に地震あり。

〔満濟准后日記〕

二日、晴、今夜子末地震、傍通龍神動也、不快歟。

180 永享二年十月二十六日 (1430-XI-21, 2243681)・京都に強い地震あり。

〔満濟准后日記〕

廿六、晴、子終刻 大地震。在方卿申、水神動、五十日内兵革、天下飢疾等云々。不快歟、有盛卿中、金翅鳥動、占文不快、

(○十一月)三日晴、有盛卿相語云、去月変異、占文不快、同廿六日地震、金翅鳥動、占文同前(云々)。在方卿水神動由注進。如何由尋処。申謬歟、金翅鳥勿論、現凶慥伺試云々。

181 永享二年閏十一月二十四日 (1431-I-17, 2243738)・京都に地震あり、翌日御所に光物飛ぶ。

〔満濟准后日記〕

廿四日、晴、卯刻以後地振、傍通房宿也。若吉動歟。

廿五日、晴、自畠山方内々申旨有之。御所中ニ恠異連々在之。一度ハ松ハヤシヲシテ虚空ヲ過スル様ニ聞了、一度ハ又光物自御所中出現。一度ハ如人魂光物又出現云々、及三ヶ度（○中略）、去廿四日地動事、尋有盛卿処、金翅鳥動云云、月在亢宿云々。

182 永享三年一月十六日（1431-III-9, 2243789）、京都鳴動する。

〔満濟准后日記〕

十六日、晴、今朝辰初刻非地震、聊鳴動事在之。相尋処。承候き不審存。若雷声地中ニ聊発声体ニ候歟、今日驚蟄節候也。但又如何云々。尤不審由在方卿申也。

183 永享三年十月二十七日（1431-III-10, 2244065）、京都に地震あり。（1-379）

〔看聞御記〕

廿七日、晴、已剋小地震帝尺動也。

184 永享三年十一月十二日（1431-III-25, 2244080）、京都に地震あり。（1-379）

〔看聞御記〕

十二日、晴、今夜亥時地震、帝尺動也。

〔満濟准后日記〕

十二日、晴、亥半歟小動。

○都司注、（1-379）には文献名記載に誤りがある。右の通りを正し。

185 永享四年二月十八日（1432-III-29, 2244175）、京都に地震あり。
〔看聞御記〕

十八日、晴、戌刻小地震帝尺動也。

186 永享四年六月十八日（1432-III-24, 2244292）、京都日吉八王子山震動し、三十日まで続く。

〔満濟准后日記〕○六月三十日の条。

晦日。晴。自広橋中納言方奉書到来。二星合変異。并日吉八王子山震動事等御祈。自来四日別而可致懇祈云々。次当寺々僧等各可抽精祈云々。奉書案。

二星合変異候。加之日吉八王子山震動事。旁以御祈禱事。別而自来月四日可有御祈念之由仰候。御結願可為同十三日之旨被仰下候。以此趣同可有御下知醍醐寺之由。可令得御意給候也。恐々謹言。

六月卅日

兼郷

理性院僧正御坊

請文。

就変異并八王子山震動事。自来四日可致懇祈之由承了。修愛染王護摩可抽丹誠候。当寺々僧等各可凝精祈之旨。同令存知之由可令披露給也。謹言。

六月卅日

判

七月四日、晴、自今夕変異并八王子山震動等御祈愛染護摩開白。但用手代了。賢快僧当寺御祈毎日於社頭尊勝タラニ誦之。結番了。存方卿来申。変異相刻古文旁「不快云々。次八王子山」鳴動事先規未無之「云々。鳴動去月十八日。十九日。廿日」三ヶ日云々。但此日限不分明云云。占文事社家注進時刻不分明間。不及勘進。又重無御尋儀云々。因在方卿語云。大宮杉木上。黄衣着タル宮仕六人徘徊。自山上下山衆徒兩三人見之。希代々々。今月初比事云々。

187 永享四年十一月九日 (1432-Ⅻ-10, 2244431)・大和、山城の山陵鳴動する。

〔満濟准后日記〕

九日、晴、御陵今曉鳴動及兩三度也。

廿三日晴、自大乘院音信、去九日曉聖武天皇御廟以下所々鳴動及兩三度云々。当所延喜御陵鳴動同時同日歟。希代事也。將軍墓同動揺々々。

188 永享四年十一月十八日 (1432-Ⅻ-19, 224440)・京都八幡社

鳴動する。

〔満濟准后日記〕

十八日、晴、戌刻八幡社頭三ヶ度鳴動云々。

189 永享五年一月二十四日 (1433-Ⅱ-23, 2244506)・伊勢、近江

地震強く、京都も地震あり。(1-380)

△〔看聞御記〕

廿四日、抑西時大地震以外也、消肝、帝尺動也。

(〇二月)十六日、晴、先日地震天下病惱、薬師如来衆生二相替病給云々、仍諸方薬師へ万人参之由風聞。

△〔満濟准后日記〕

申刻大地震、現凶尾宿、竜神動云々、雖然以傍通曆面斗宿、天王動之由注進云々。

190 永享五年四月十八日 (1433-V-26, 2244588)・京都に鳴動あり。

〔看聞御記〕

十八日、晴、抑午剋坤方聊鳴動。

191 永享五年閏七月二十一日 (1433-Ⅶ-13, 2244708)・京都に地震あり。

〔看聞御記〕

廿一日、晴、朝小地震、帝尺動也。

192 永享五年八月二十二日 (1433-X-14, 2244739)・京都に地震あり。

〔満濟准后日記〕

廿二日、晴、亥初歟小動。

193 永享五年九月二十七日 (1433-Ⅸ-17, 2244773)・京都に地震あり。

〔満濟准后日記〕

廿七日、晴、後夜時間地動。金翅鳥云々。小動也。

194 永享六年三月十八日 (1434-V-6, 2244943)・京都に地震あり。

〔看聞御記〕

十八日、晴、〔頭書〕辰時小地震。

195 永享六年十月二十六日 (1434-Ⅹ-5, 2245156)・京都に地震あり。(1-387)

〔看聞御記〕

廿六日、晴、卯剋小地震。

196 永享八年十一月八日、九日 (1436-Ⅺ-23, 24, 2245905, 06)・京都に光物飛び大地震動する。

八日、晴、抑夜亥時。天変飛。其後屋上物之如落懸震動。而々仰

天見之。何も不見。以前光物飛云々。予光物ハ不見。不思議事也。九日。晴。夜前光物事。諸人見之。自北方指南方飛。賀茂山辺より飛歟云々。光之中ニ□形跡顯見。其光長。光之下ニ如星飛散云々。其光消後有震動。都鄙同前云々。八幡山も震動。天変ハ八幡へ飛云々。種々説風聞恠異勿論歟。

197 永享九年六月四日 (1437-III-16, 2246110) 、奈良東大寺八幡宮震動する。

〔東大寺別当次第〕△正、56△
永享九年六月、当寺八幡宮御震動事、四日未尅御震動（其音茶碗ヲ積重テツキツス音如シ、又自御殿之内風吹テ御簾一尺計アガル、又御殿御戸アクガ如クキリキリトナル）同夜子時又御鳴動、同夜卯時又御鳴動、其音同前、次日五日辰尅限又御震動、其音又如雷電トノトノト聞了、兩日合四度、希代不思議、瑞相難計者歟。

198 永享十年十月十日 (1438-IV-6, 2246588) 、京都に地震あり。
〔看聞御記〕
十日、晴、入夜風雨烈、昼有小地震、龍神動也。

199 永享十年十一月七日 (1438-VIII-3, 2246615) 、京都に地震あり。
〔看門御記〕
七日、晴、辰時小地震。

200 嘉吉三年十一月七日 (1443-XII-7, 2248445) 、將軍塚鳴動す。
〔看聞御記〕

七日、晴、將軍塚此間鳴動云々。

201 嘉吉三年十一月二十一日 (1443-XII-21, 2248459) 、京都二度鳴動あり。

〔看聞御記〕
抑（宵）兩度鳴動、若將軍塚歟不審。

202 宝徳元年四月十二日 (1449-V-13, 2250429) 、山城、大和大地震、家屋被害あり、余震七月に及ぶ。（I-395）

〔看聞御記〕○七月二十八日の条。
〔皇年代略記〕△正、32△
元年己巳、七月廿八日改元、依永害地震疫飢饉也。

〔皇代略記〕△統、82△
文安六、七、廿八改元、依諸社震動大地震病死也。
〔内宮氏経日次記二〕△統々、1△
十七日、（○宝徳元年四月）晴、自十四日可致地震御祈之由事。

203 享徳元年 (1452) 、北陸道洪水山崩れあり。

〔立川寺年代記〕△統、859△
○「立川寺」は越中か。
同（○享徳元年）、北陸道癸酉（○享徳二年）マテ小兒イモヤミシテ多死。処々洪水山抜人多打死。

204 長祿二年一月二十八日 (1458-II-21, 2253635) 、奈良に地震あり。
〔大乘院寺社雜事記〕
廿八日、地振、火神動。

205 長祿二年閏一月三日 (1458-II-25, 2253639) 、京都、奈良に

強き地震あり。(I-405)

〔大乘院寺社雜事記〕

一、夜入テ大地震、龍神動、不吉。

206 長祿二年閏一月四日 (1458-II-26, 2253640) 、奈良に地震あり。

り。

〔大乘院寺社雜事記〕

四日、地震了。

207 長祿二年七月二十四日 (1458-K-10, 2253836) 、京都に地震あり。(I-405)

〔大膳大夫有盛記〕

〆続、909〃 ○賀茂在盛筆

廿四日己酉、未時大地震。

208 長祿三年七月十一日 (1459-M-18, 2254178) 、奈良に山崩れあり。

あり。

〔大乘院寺社雜事記〕

十一日、高山奥御崩、自城越智方ニ引籠云々。

209 寛正二年十月二十一日 (1460-M-2, 2255013) 頃京都將軍塚

鳴動する。

〔大乘院寺社雜事記〕

一、自寺務被抑下、京都將軍塚此間日夜鳴動。結句玉打候なる。

以下慎之由申合云々。

210 文明三年五月十四日 (1471-W-11, 2258493) 、京都、奈良に

強き地震あり。(I-415)

〔内宮祢宜荒木田氏経引付下〕

〆続、24〃

地震御祈事、自来廿二日、殊抽精誠、於十七ヶ日之間、可攘災

於千里外之由、可被下知神宮之旨、被仰下候也、謹言。

公兼

211 文明四年 (1472) 、京都侍所鳴動する。

〔内宮祢宜荒木田氏経引付下〕

〆続、24〃 (文明四年) 旧冬彗星出現、当年内侍所鳴動等之御祈禱事、被仰

下処。(〇以下略)

212 文明八年六月十六日 (1476-M-16, 2260355) 、京都に地震あり。(I-420)

り。

〔内宮祢宜荒木田氏経引付下〕

〆続、24〃 去十六日地震公武御祈事、扱吉曜、一七ヶ日、可抽懇丹之由、可

令下知内外官祢宜等給之旨、被仰下候也、謹言。

六月十九日

資綱

祭主三位殿

213 文明八年九月十二日 (1476-X-8, 2260439) 、桜島噴火する。

(I-402)

〔島隠集上〕

〆続、336〃 烈火曾焼一島来、桑田碧海惣休猜、去年潤底草深处、七里平原沙

作堆。

七里原次玉洞翁之韻。

山似崑崙最上巔、風吹猛火起雲烟、平岡七里沙如雪、草樹何愁白

髮前。

214 文明九年五月十八日 (1477-W-7, 2260711) 大和大雨、山崩

れあり。

〔大乘院寺社雑事記〕

十八日、夕立、大雨下。

一、此間大雨ニ穴瀬山之十市之新造寺崩落了。今分ハ不可成立、穴瀬明神御計也云々、先老入滅、又山崩流、希有事也云々。

215 文明十四年五月七日 (1432-VI-2, 2262502) 、奈良に地震あり。

〔大乘院寺社雑事記〕

七日、地振、金翅鳥動、不吉。

216 文明十四年閏七月十六日 (1482-K-8, 2262600) 、奈良に地震あり。

〔大乘院寺社雑事記〕

十六日、夜地震、龍神動。

217 文明十五年五月八日 (1483-N-22, 2262887) 、京都に地震あり。

〔お湯どのの上の日記〕

八日、けさちしんゆる。

218 文明十八年四月二十五日 (1486-VI-6, 2263967) 、奈良、京都に地震あり。(I-430)

〔お湯どのの上の日記〕

廿五日、雨ふる。なへゆる。(○なるカ)

219 文明十八年七月十七日 (1486-VIII-25, 2284047) 、奈良に地震あり。

〔大乘院寺社雑事記〕

十七日、地動、庚申。

220 延徳三年八月十三日 (1491-K-25, 2265904) 、京都に地震あり。(I-434)

〔お湯どのの上の日記〕

十三日、ひかんの入、よるにちしんゆる。

十月十九日、ちしんのまつりおこなわる。

○都司注、十月十九日の記事は、八月十三日の記事と関係あるか否か不明。

221 延徳三年十一月二十三日 (1492-I-2, 2266003) 、奈良に地震あり。

〔大乘院寺社雑事記〕

廿三日、後夜以後地振。

222 明応元年一月十九日 (1492-II-26, 2266058) 、奈良に地震あり。鳴響を伴う。(I-434)

〔大乘院寺社雑事記〕○二十日の条。

昨日十九日、八時分天下動了、如雷音也。

223 明応元年三月二日 (1492-III-7, 2266099) 、奈良に地震あり。〔大乘院寺社雑事記〕

二日、地振。

224 明応元年六月二十九日 (1492-VIII-1, 2266215) 、奈良に地震あり。〔大乘院寺社雑事記〕

廿九日、地振。

225 明応二年一月十八日(1493-III-3, 2266411)、京都に地震あり。
〔お湯どのの上の日記〕

十八日、けさ地しんゆる。

226 明応二年四月十五日(1493-V-9, 2266411)、京都に地震あり。
〔お湯どのの上の日記〕

ひるよりさき程にちしんゆる。

227 明応二年十月七日(1493-X-24, 2266695)、奈良に地震あり
また猿沢の池の水変色する。

〔大乘院寺社雑事記〕

七日、地振、猿沢池水近日変色、不吉事也。

228 明応二年十月十九日(1493-XII-6, 2266707)、奈良春日山鳴動する。

〔大乘院寺社雑事記〕○十月二十日の条。

自夜前当山鳴動、今日及数尅希有事也、且如何(○十一月十五日の条) 去月十九日春日山鳴動事。

229 明応二年十月二十九日、三十日(1493-XII-16, 17, 2266717, 18)、奈良、京都に地震あり。(I-438)

△〔大乘院寺社雑事記〕○十一月十五日の条。

去月廿九日地振不吉也。十月卅勘進同。

〔お湯どのの上の日記〕

廿九日、こよひちしんけうけうけうしうゆる。

230 明応二年十一月一日(1493-XII-18, 2266719)、京都に地震あり。
〔お湯どのの上の日記〕

一日、けさもちしんゆる。

231 明応二年十一月三日(1493-XII-20, 2266721)、京都に地震あり。(I-437)

〔お湯どのの上の日記〕

三日、こよいもちしんゆる。

232 明応二年十一月十四日(1493-XII-31, 2266732)、奈良に地震あり。(I-437)

〔延徳記〕

一、地震御祈事、一七ヶ日間、殊可抽精誠之由、可令不知神宮之旨、被抑下候、仍言上如件、尚頼誠忠頓首謹言。

十一月十四日

右少辨尚頼奉

進上日野一位殿

○都司注、同様の文が、同書に他に2通あり。日付はそれぞれ十二月二日、十二月十日となっており、また〔度会常有家引付〕

へ続、26へにも同年十二月付の同様の文がある。いずれも地震の日次、場所は正確に判定し難い史料である。

233 明応二年十二月四日(1494-I-20, 2266752)、京都に地震あり。(I-437)

〔お湯どのの上の日記〕

四日、あかもちしんゆる。

明応三年五月七日 (1494—Ⅱ—19, 2266902)、大和大地震、東大寺、興福寺など諸寺はじめ多くの家屋に被害あり、京都も強い地震あり。(1—438)

〔長享年後畿内兵乱記〕△続、580▽

明応三年三月七日大震動。

○都司注、五月の誤りか。

〔お湯との上の日記〕

七日、ちしんけうけうしうゆる。せんもんともまいる。(○占文)

八日、ちしんよへもたへすゆる。

九日、けふも地しんゆる。

十日、けふもちしんゆる。

十一日、ちしんゆる。

十二日、ちしんけふもゆる。

十三日、地しんゆる。

廿三日、けふも四の時分にちしんゆる。

△〔大乘院寺社雑事記〕○(1—439—441)に余震記事を含む多数の記事が掲載されているが、その脱漏部分だけを左に記すことにする。

五月七日、金翅鳥動。

八日、金翅鳥動。

十九日、寛田新木庄ニ差下之、御領中ニ池回文在之、用水用也。

此内本ノ大池今度地振ニ堤切る、六門(○「三間」と書いて消してある)口計人夫勘定之、千四百文(人)、此内七百人ハ公方、人夫一升宛、但一庄ノ田地ニ打之間不功御米田、惣而公方分三石余可申立用、来秋御米之内也。

〔招提千歳伝記下〕△続々、ニ▽ ○原文では永正三年とよめる位置にあるが、干支が合わず、明応と解すれば干支が合う。

同三年甲寅夏五月七日大地震、此時、四絹索堂貝吹堂北室西塔文

殊堂中門西東両門及四方築地坊院等悉破壊顛倒云。

235 明応四年一月十六日 (1495—Ⅱ—20, 2267148)、奈良に地震あり。

〔大乘院寺社雑事記〕

十六日、地振。

236 明応四年二月十九日 (1495—Ⅲ—24, 2267180)、奈良に地震あり。

〔大乘院寺社雑事記〕

十九日、雨下、地振。

237 明応六年十月十八日 (1497—Ⅳ—21, 2268153)、京都、奈良に強い地震あり。(1—443)

〔大乘院寺社雑事記〕

十七日、夜大地震振也、帝尺動。

〔お湯との上の日記〕

十八日、あめふる、あか月ちしんをひた、しうゆる。

〔長享年後畿内兵乱記〕△続、580▽

同(○明応)六年十月十一日寅刻、大地震。

○都司注、十八日の誤りか。

238 明応七年一月一日 (1498—Ⅱ—1, 2268225)、將軍塚鳴動する。

〔大乘院日記目録〕

明応七年^{戊午}。正月元日、將軍塚(塚カ)鳴動。

239 明応七年一月十七日 (1498—Ⅱ—17, 2268241)、奈良春日山鳴動する。

〔大乘院日記目録四〕

近日連々春日山鳴動之由祐嗣申。

240 明応七年五月二十五日 (1498-Ⅱ-23, 2268367) 頃、奈良で火

柱見える。

〔大東院寺社雑事記〕

此四五日内、竜花院方火柱立。

241 明応七年六月十一日 (1498-Ⅲ-9, 2268383) 、京都、三河、

奈良、熊野に強い地震あり。(1-444)

〔大乘院寺社雑事記〕

一、大地震、帝尺動

242 明応七年六月二十四日 (1498-Ⅲ-22, 2268396) 、奈良に地震あり。

〔大乘院寺社雑事記〕

廿四日、大地震。

243 明応七年八月二十五日 (1498-Ⅳ-20, 2268456) 、大和、伊勢

紀伊、山城、三河、遠江、甲斐、駿河、伊豆、信濃、に大地震あり地震後大津波が紀伊半島から房総半島にわたる海岸をおそった。「明応地震」。(1-446)

△〔大乘院寺社雑事記〕○(1-451)の記事には、多くの脱漏あり、また日付の誤記もあるので全記事を次にかかげる。

八月二十五日、大地震、火神動、地藏堂南庇崩了。地震故也。

廿八日、大雨下、自廿五日至今日連日地震。

九月二日、雨下、夜地震。

四日、夜地震。

十月廿八日、地震、夜雨下、雷光、八月廿五日大地震、火神動以來、日々夜々令連続者也。

後(○閏)十月十九日、数日地震連続了。

〔皇年代略記〕△正、32△

七年八月廿七、遠州今切崩出云々。

〔宗長手記〕△正、326△ ○大永六年(1526)の記述。

こゝ(○浜松)をたちて浜名橋、ひととせの高汐より、あら海おそろしきわたりす。

244 明応七年八月二十八日 (1498-Ⅳ-23, 2268459) 、富士五湖地

方に山崩れあり、人多く死ぬ。

〔妙法寺記上〕△続、878△ ○甲斐国

同月二十八日大雨大風無限。申尅当方ノ西湖長浜、大田輪、大原悉壁ニオサレテ人々死事大半ニ超エタリ。アシワタ小海ノ巖皆流レテ白山ト成ル。

245 明応八年一月二日 (1499-Ⅱ-20, 2268609) 、大和多武峰鳴動する。

〔大乘院寺社雑事記〕○二月十日の条。

正月二日多武峰鳴動。

246 明応八年六月十八日 (1499-Ⅳ-4, 2268774) 、奈良に地震あり。

〔大乘院寺社雑事記〕

十八日、地震、夕立。

247 明応八年七月十六日 (1499-Ⅳ-31, 2268801) 、京都、奈良に地震あり。(1-461)

〔お湯どのの上の日記〕
十六日、ちしんゆる。

248 明応八年九月十日 (1499-X-23, 2268854) 奈良に地震あり。

〔大乘院寺社雜事記〕
十日、地振。

249 永正七年八月八日 (1510-M-21, 2272839) 摂津、河内に大

地震あり、四天王寺鳥居崩れ、藤井寺潰れる。大阪湾津波あり。
(1-470)

〔藤井寺勸進帳〕 〱続、801 〱

于茲去明応第二癸丑夏。依一國乱罹兵火者。樓門。三重大塔。六
十六部奉納所。鎮守并業平朝臣造立奥院等悉焼失訖。雖然本堂一
宇。塔一基。巍然而有之。仍衆等之願望相殘蹤跡。憑諸檀那之合
力。所欲興梵刹之旧基。永正七年八月八日曉依大地震一寺滅亡。
万民之愁歎不能言詞。雖然本尊無恙。前蹤未聞希代之仲変也。一
刹伽藍之退転者衆生摂化之方便也。誠歎之中悦也。伏願人々宜勵
伽藍再營之志。不耻一紙半錢之少財。所頼無餘。夫以千手觀音者
四八端嚴之慈客。三千正覺之導師也。供養者福等河沙寿算久長。
凡持念輩罪消塵却災禍除。経曰。有人貧窮下賤多受病苦。愚癡暗
鈍不辨善惡。若能称念我名。一切所求必定成就。富貴自在。無病
安樂。虚空有尽。讚歎無窮。一見一礼者永離三惡趣。滿二世之願
望者也。仍勸進之旨趣如件。敬白。

永正七年十一月 日 勸進沙門 敬白

250 永正九年六月二十三日 (1512-M-14, 2273532) ころ、伊勢
(?)、夜々地震あり。

〔内宮祢宜荒木田守宸引付下〕 〱続、24 〱

注進、早可被経次第御汰沙(〇ママ)本宮御造管事右当宮御造管運々、
天下之表事、神宮之重事、不可過之、就中日々之風雨、夜々之地震、
其外不吉、難治次第繁多也。(〇中略)

永正九年六月廿三日

大内人正六位上荒木田神主長吉上

祢宣從四位上荒木田神主守則

十人皆署

251 大永六年十月十二日 (1526-M-26, 2278749) 京都に強い地

震あり。(1-497)

〔お湯どのの上の日記〕

十二日、〔頭書〕地震大にあり、あられもふる。

252 大永七年二月十三日 (1527-M-25, 2278868) 京都に地震あ

り。(1-498)

〔お湯どのの上の日記〕

十五日、ちしんのせんもんまいる。(〇占文)

253 享祿元年五月十一日 (1528-M-7, 2279308) 京都に地震あ

り。

〔お湯どのの上の日記〕

十一日、ちしんゆりてせんもんまいる。(〇占文)

254 享祿元年十月十二日 (1528-M-3, 2279487) 京都に地震あ

り。

〔お湯どのの上の日記〕

十二日、よるちしんする。

255 天文二年九月二十七日 (1533-X-25, 2281274) 京都に地震あり。(1-504)

〔お湯どのの上の日記〕
廿七日、地震よるの良の刻。

256 天文三年三月十一日 (1534-V-4, 2281465) 京都に地震あり。

〔お湯どのの上の日記〕
十一日、〔頭書〕よる地しんする。

257 天文三年六月二十三日 (1534-III-12, 2281565) 京都に二度地震あり。

〔お湯どのの上の日記〕
廿三日、〔頭書〕ひるの七時分地震二度までする 動もあり。
廿六日、あき富の卿ちしんのせん文しんする。

258 天文三年十一月 (1534-III-16~, 2281691~) ころ、天下鳴動する。

〔快元僧都記〕△正、456▽ ○鎌倉。
去年十一月比、節々天下鳴動。及数ヶ度。諸人驚_レ耳。

259 天文四年十一月二十七日 (1535-III-31, 2282071) 京都に地震あり。(1-505)

〔お湯どのの上の日記〕
廿七日、ちしんそとゆる。

260 天文七年一月二十日 (1538-III-1, 2282862) 京都に地震あり。

〔お湯どのの上の日記〕
廿日、ちしんおひたしくゆる。
廿一日、ちしんのせんもんあきとみまいらす。(○占文)

261 天文九年九月三日 (1540-X-12, 2283818) 鎌倉鶴岡八幡神殿鳴動する。六日虚空鳴動する。

〔快元僧都記〕○鶴岡八幡造宮の記録。
三日、亥刻御神殿鳴動、番衆驚_レ耳畢。
六日、虚空鳴動、狐鳴夜々、在家院社中甚_ニ云々。

262 天文十一年二月二十八日 (1542-III-24, 2284346) 近江坂本で二度地震あり。(1-508)

〔お湯どのの上の日記〕○二月三十日の条。
卅日、廿八日の神なり、坂もとにはつよくなりて、いなひかりする。あられもふる。地しんも二度までゆるとなり、京のかたはいさゝかも地しんせず。きとくなるよし皆々さたなり。

263 天文十一年三月六日 (1342-W-1, 2284354) 奈良、京都に強い地震あり。(1-508)

〔お湯どのの上の日記〕
六日、〔頭書〕ちしんゆる。
〔多聞院日記〕○三月十日の条。
去六日戌ノ終ニ、両度マテ大地震、仰天畢、帝尺動云々、有ル雜抄ニハ、今月ノ地震大早魃ニ立ツト云々、無心元者哉。

264 天文十三年七月九日 (1544-III-7, 2285213) 畿内山崩れあり。

〔長享年後畿内兵乱記〕△続、580▽

同十三年、甲辰、七月九日、大洪水、山岳崩裂。

265 天文十五年七月五日 (1546-W-11, 2285947) 、甲斐郡内、五湖地方山崩れあり。

〔妙法寺記下〕△続、878△ ○甲斐国都留郡木立村
天文十五丙午、此年七月五日大雨降、大水出、此近辺山クツレ候而、田地作毛悉押流シ申候、殊ニヲタレノ田地悉オシナカシ申候。

266 天文十五年八月二十三日 (1546-W-27, 2285994) 、京都で黄い雲現われる。

〔皇年代略記〕△正、32△
同十五八廿三酉刻黄雲現、草木黄色、人面変金色。

267 弘治三年八月 (1557-W-3, 22899888) 、畿内に強い地震あり。

〔長享年後畿内兵乱記〕
同三、丁巳年、八月大地震。

268 永禄十一年八月二十四日 (1568-W-25, 2294028) 、泉和、堺住吉社鳴動する。

〔切支丹宗門来朝実記〕△続々、12△
永禄十一年八月廿四日、泉州堺住吉の社震動する事久し、然も神前の松六十六本同時に根より倒る。

269 元亀元年四月三十日 (1570-W-13, 2294654) 、奈良に地震あり。

〔多聞院日記〕
晦日、午剋地震了、近日雨不下、如何。

270 元亀二年三月一日 (1571-W-5, 2294950) 、奈良に地震あり。

〔多聞院日記〕
三月朔日、今晝地震、大神動、病、ヒテリニ立ト云々。

271 元亀三年閏一月二十日 (1572-W-14, 2295294) 、奈良に強い地震あり、人死ぬ、二十日光物飛ぶ。(1-540)

〔多聞院日記〕○二十二日の条

一、廿日ノ晝大地震了。火神動云々。人民死日損ニ当ル歟。
一、近般サル沢ノ池へ天照太神御移トテ、団粉シテマイラスルト、申、万方ヨリタンコマイラスル由也、池赤土ヲコネタルやうニ色カヘルト、如何、凶事ト云々。

一、昨夕入逢ノ時分ニ、アカリ障子程ナル光リ物南ヨリ北へ飛行ナラ中各々見了ト、希代ノ凶事如何、心細き者也、去五日ノ夜モ飛了、近日大地震了、凶事打続いか。

272 元亀三年五月十三日 (1572-W-3, 2295405) 、京都に地震あり。(1-541)

〔お湯どのの上の日記〕

十三日、「頭書」ちしんあしたの四時にゆる。

273 元亀三年六月一日 (1572-W-20, 2295422) 、京都、奈良に地震あり。(1-541)

〔お湯どのの上の日記〕

一日、ちしんゆる、三とまでゆる。

274 天正二年四月二十一日 (1574-V-21, 2296092) 、奈良に地震あり。

〔多聞院日記〕○四月二十五日の条

去二十一日夜地震了。

275 天正六年十月二十九日 (1578-Ⅺ-8, 2297754) 、奈良に強い地震あり。

〔多聞院日記〕
廿九日、大地震了、日中之過也、近般可有物云々、物恠々々。

276 天正八年一月二十日 (1580-Ⅱ-15, 2298188) 、奈良に地震あり？

〔多聞院日記〕○天正十三年七月の条
先年木沢左京亮信貴山ニ城ヲ拵、久当国闕所知行閏三月七日ニ不慮ニ云々。其正月廿日刻ニ大地震了、其以来度々雖有地震無指儀、今月ハ地儀令滅却歟ト仰天了、秀吉天下一同ニ令補佐、昔モ不聞及盛者必衰時至歟、沈思々々。(○都司注、閏三月があるのは天正八年である)

277 天正十年八月二十三日 (1582-Ⅱ-19, 2299135) 、京都に地震あり。(1-549)

〔度会常有家引付〕ハ続、26>
注進、任御教書之旨致地震御祈事。
右就于地震御祈、九月十二日宣下、同日祭主下知、十二月十九日下着、同廿日神主告知、因此、一七ヶ日抽丹懇、奉遂聖運長久天下泰平、之御祈之旨、注進言上如件。
天正十二年十二月

大内人正立位上度会神主久能上

祢宜 貴彦

○都司注、同様の文が〔永正以来宮司引付〕ハ続、32>にもある。

278 天正十一年三月三日 (1583-Ⅳ-24, 2299350) 、奈良に地震あり。(1-550)

〔多聞院日記〕
一、昨日午之時分に地震了、当年繁ク在之。無覚束者也。
○都司注、文頭は「一昨日」と読んで誤り、「一」は記述項目を示す「一」である。(1-550)ではこの点を誤読して、地震の日付を三月二日としている。同書三月三十日の項に次の記事あり。
当年種々と凶事、大地震数度、猿沢池の水カエル。

279 天正十三年七月五日 (1585-Ⅶ-31, 2300181) 、三河、奈良に強い地震あり。(1-552)

〔多聞院日記〕
五日、今日未刻大地震、越常篇了。先ツ火神動ト見タリ、七月ノ地震ハ大兵乱也、火神動ハ中央ノ恠異ニテ、天子死、臣下亡、天下人民多死ト云々。

280 天正十三年十一月二十九日 (1586-Ⅰ-18, 2300352) 、畿内、東海、東山、北陸諸道大地震、飛驒、越中などで死者あり、「天西地震」(1-553)

〔享祿以来年代記〕ハ続、861> ○十二年の項にある。
十一月二十九日地震、踰年不止。
〔永祿以来大事記〕ハ続、862>
十月地震。

〔東福紀年録〕ハ正、431> ○東福寺は京都市東山区

天正十三年
東福山門地震傾倒。秀吉公賜可修補之状并御朱印而造営之。

△〔多聞院日記〕〇(1-554~556)の記事に次の文を補う。
(○天正十四年二月)十二日、七ノ過ニ地震了。此間モソトツ、
毎日動了、去年ヨリ今日迄如此、七十五日計歟。

(○二月)二十六日、違光暁了、今暁大雷、雨少降、光了、夜明
テハ雨不降、当山アセホノ花一向不付。上下向ノ間ニ欠一枝見了
能付ヌレハ豊熟了、春ノ大雪、地震、数日大雷、消肝逆雨、旁々
心細者也。(○「アセホ」とは「アセビ」のこと)

(○三月)二十七日、又今朝地震ツヨク動了、ハテヤラヌ事也。

(○八月)二十一日、去十七八日ノ比歟、三条ノアタリニ火数多
飛去テ在之。狐沙汰歟云々。大坂モ爰元モ毎度飛火在之之由各申
不吉之題目也。

(○九月)十八日、從京禁中近日以外鳴動之。可有祈禱之旨倫旨
下了云々、大津之城、坂本、大坂ニモ恠異共、心細事也。

(○十一月)二日、西京薬師堂ニ大ナルカナ仏ノ掘出タルヲ。順
慶之時入テ被置タルヲ、大地震ニコロヒテ額ヌケタルヲ盜テ、堺
へ売ニ出ケルヲ令才学、取返兩人召取、一人ハ大将ナレハハタ物
ニ上、一人ハクヒヲ切テカウニカケテアリ。

281 天正十五年一月八日(1587-II-15, 2300745)、奈良に地震あり。
〔多聞院日記〕〇九日の条

昨夜亥ノ初点ニ地震了。

282 天正十五年二月二日(1587-III-10, 2300768)から三日にかけて、奈良に地震あり。

〔多聞院日記〕〇三日の条
昨夕自戌刻今暁迄三度地震了。

283 天正十五年二月二十二日(1587-III-30, 2300788)、京都、奈良に地震あり。(1-575)

〔多聞院日記〕

廿二日、今暁地震了。近日度々。

284 天正十五年三月十三日(1587-IV-20, 2300809)、奈良に地震あり、同月七日天変ありという。

〔多聞院日記〕

十三日、去々年ノ十一月廿九日ヨリ昨今迄浅深軽重(程量カ)大小コソアレ、地震毎日毎夜也、去月ハ昼夜度々、当山ヨリ西へ幡雲立了、当月七日ニハ四打ノ時分ニ日輪五出了、各慥ニ見之、黒日、赤日色々也シト云、七難ノ最頂、抑天地ノ物恠、非欠事ニ、一天ノ動乱眼前也、沈思々々。

285 天正十六年三月十日(1588-V-5, 2301160)、奈良で火柱が見える。

〔多聞院日記〕〇十四日の条

去十日ノ夜初夜時分ニ寺林ヨリ見レハ丑寅ノ方春日山ノ北荒神ノアタリニ、御山ヨリモ高ク火柱大ニ立、雲焼ヲヒタシク立了ト各慥ニ見タル由也、去年モ種々天地ノ恠異雖在之、何事モ無之。

286 天正十六年十二月十二日(1589-I-28, 2301458)、三河、奈良に地震あり。(1-577)

〔多聞院日記〕

十二日、今暁地震了。

○都司注、(1-577)記載の西暦換算に誤あり。

287 天正十八年一月十八日(1590-II-22, 2301848)、奈良、京都

に地震あり。

〔お湯どのの上の日記〕

十八日、このあか月地しんそとゆる。

288 文祿元年二月二十七日（1592—IV—9, 2302625）、奈良に強い地震あり。

〔多聞院日記〕

廿七日、今晚大地震了。

289 文祿元年十一月十三日（1592—XIII—16, 2302876）、奈良に強い地震あり。

〔多聞院日記〕

十三日、亥終子ノ始ニ大地震仰天了。

290 慶長元年閏七月十二日（1596—IX—4, 2304234）豊後に大地震あり。別府湾に津波おこる。瓜生島沈下し、死者七百八人を出す。

（1—589）

〔玄与日記〕△正、325▽

それよりさかの関迄御着被成候、去七月十二日地震之時、かみの関と申浦里は、大波にひかれて家かまともなし、いのちを失なふもの数をしらす、哀なる事ともなり、彼須磨の巻に、高塩におちて、むすめをは岡部の里へやり得ると見えしも、ことはりおもひしられ侍りぬ。（○中略）十八日大坂江着船なり、地震の折節、浪たかく風はけしき海上、つつかなく侍りつること、仏神のまもりうたかいなくおもひはへりぬ。

291 慶長元年閏七月十二日（1598—IX—5, 2304235）、諸国毛降る。

（1—650）

〔皇年代略記〕△正、32▽

京師畿内関東諸国降毛四五寸。

292 慶長元年閏七月十三日（1596—IX—5, 2304235）、山城、摂津

和泉等の諸国大地震。京都三条から伏見にかけて被害大きく、伏見城天守大破する。死者は六百人に及ぶ。（1—605）

〔豊臣記〕△続、584▽

東北五畿ノ諸勢雪苦霜辛メ、築立シ伏見ノ城、去年七月十二日ノ大地震ニ顛倒ス。

〔享祿以来年代記〕△続、861▽

閏七月十二日大地震、禁中築地堂舎伏見矢倉男女庄死者多、大仏像腹崩、止供養事。

〔清正記二〕△続、652▽

慶長元年七月十二日之夜大地震ゆる。式百年三百年にもかゝる例を不及聞、日をこゑてやます。洛中洛外伏見大坂は不及申。五畿内押並て地震、京中其外在々所々に至迄一字も不残倒れ、おしに打れ死者数を不知、地震ゆると則清正起揚、式百人之足輕に手子を持せ、侍共召連、伏見の御城へはせ行、太閤御座候邊迄被参、太閤も御居間を御出座有て、大庭へ出御被成、御敷物を敷、幕屏風にてかこひ、大挑灯をとほさせ被成、御座所へ主計頭つと被参候へば、太閤は女の御装束にて、政所様、松の丸殿、高藏主其外上藤衆の中に交り御座被成候、然共御声を聞しかは、はや御出被成たると悦、高藏主々々と主計被申候、誰そと答候時、加藤主計頭是迄参たり、大地震夥敷候に上様を初めおしにうたれ御座可被成と奉存、はねはつさんため式百人の足輕に手子を持せ参候通太閤様、政所様へ被仰上候へと申、其声を太閤様、政所様、被聞召、扱はやくも参たる物かな、気のきいたる者哉と、太閤被仰、政所様は、主計頭を御念比に被成により、様々の御挨拶也。

○〔清正高麗陣覚書〕へ続々、4✓も同旨、ただ「足輕二百人」が「こつかひ候もの三百」となっている」)

〔招提千歳伝記下〕へ続々、11✓ ○殿堂篇の章、招提寺は奈良市。

戒壇堂

弘安七年興立之、同九月行受戒也爾後廢則興之文
禄五年(○慶長元年)大地震此時殿堂多倒。此殿
又倒。久成莓苔之地、僅有小屋覆戒壇耳、元禄九
年、大樹一位宗子公聽其破賜于黄金若干再建斯堂
美尽善尽可謂孝謙帝命再至也。

四方築地。

四方築地者文禄五年七月十二日大地震此時悉倒也。
南方尋雖築之又悉倒也。

〔同書〕○旧事篇の章

後陽成帝^{人王百八世}慶長元年丙申秋閏七月大地震此時、戒壇堂庫院弥陀堂不動堂鐘樓山門廻廊僧坊西神社及樓門等悉倒、金殿講堂東塔等并破壊。

〔皇年代略記〕へ正、32✓

閏七十二大地震、逾月不止。

293

慶長四年、五年あるいは六年十月十二日(1599-X-29, 1600-X-17, or, 1601-X-6, 2305415, -5769, or, 6123) 下総に地震あり。

〔本土寺過去帳〕へ続、995✓ ○下総国小金、十二日の条、

日堂位^{慶長三成戌年十}、日覚位^{十月地震ノ時}、宗作位^{備前}、日詮位^{慶長七壬寅}、月池上王愷^{法輪坊塚ニテ}、

月梅好齊 ○都司注、記載の順序は正しく年次順になっている。一方、慶長

四年から六年の間、十月十二日に起こった他の顕著な地震史料は

当らない。

294 慶長三年十二月十五日(1599-I-11, 2305093)・京都に地震あり。

〔お湯どのの上の日記〕

十五日、ゆきふる、ちしんちとゆる。

295 慶長三年十二月十六日(1599-I-12, 2305094)・京都に地震あり。

〔お湯どのの上の日記〕

十六日、はるゝ、けふもちしんちとゆる。

296 慶長四年八月十八日(1599-K-7, 2305362)・京都に地震あり。(I-657)

〔お湯どのの上の日記〕

十八日、はるゝ、ちしんそとゆる。

297 慶長四年八月十九日(1599-K-8, 2305363)・京都に地震あり。

〔お湯どのの上の日記〕

十九日、くもる、ちしんそとゆる。

298 慶長十年十二月十五日(1606-I-23, 2307662)・八丈島の近くで噴火、島が形成される。(I-680)

〔皇年代略記〕へ正、32✓

同十年十月十五南海八丈嶋辺一夜大山涌出在^今。

299 慶長十二年閏四月二日(1607-V-27, 2308151)・畿内鳴響あり。

り。(1-684)

〔先代破裂集〕

慶長十二年閏四月二日、巳刻前御陵山大鳴動、神光四海輝、光物国々飛行。

300 慶長十六年八月二十一日(1611-K-27, 2309735)、会津に大地震あり。(N-688)

〔会津風土記〕へ続々、8

利田滝、在河沼郡利田村、是日橋下流也、慶長十六年八月二十一日地震、巖崩塞水湍為滝、高可一丈、兩岸相去數十丈、其断瀬魚欲上而不得。

山崎新湖、浸耶麻河沼二郡、慶長十六年秋大地震山崩地裂湖水湛焉。

太平沼、在五目村、縦二里余、横可百步。慶長十六年地震山崩為瀦云○已上在耶麻郡。

示現寺、在熱塩村。相伝空海建之始名慈眼寺、永和元年洞家源翁改慈眼為示現。翁嘗以藜杖打破殺生石其杖今尚在焉昔誤側有槻自焚三日三夜而倒塩井穿焉温泉出焉、慶長十六年秋、大地震井湯俱没数歳後鑿得温泉。柳津虚空蔵堂(○中略)奥院者大主塔也。又有辨才天(○中略)只見溪々前流而内川自村内過岩間入只見川(○中略)慶長十六年七月蒲生秀行欲流河中魚而流辛辣之毒巨鱗細鱗拳而取之、魚鱗之魚不中其毒遊泳自若也、八月地大震山崩河寒暴水襄陵溺死者甚多、秀行逝人言使魚為崇矣。

幡宮震動する。

〔里見軍記〕へ続、611

癸丑(○慶長十八年)八月上旬申下シ、守家カ打タル腰ノ物ヲ代リニ立タセ上玉エハ其夜鶴谷八幡宮震動スル事夥シ。

302 慶長十九年十月二十五日(1614-X-26, 2310891)越後、相模紀伊、山城、伊予、伊豆の諸国に強い地震あり。(1-707)

〔統皇年代略記〕へ続々、2

十月十五日地震。

303 寛文二年五月一日(1662-W-16, 2328260)、近畿全般、三河、駿河、信濃に大地震あり、人畜家屋の被害多く、各地の城郭破損する。(1-815)

〔招提千歳伝記下〕へ続々、11

○殿堂篇の章、奈良市唐招提寺東塔。

東塔者平城天皇(嵯峨皇帝之御宇也)勅建之也、大同五年從五位下江沼臣小並等為其勅使四間四面高一十二丈五層之大塔也。(○中略)其後時々破壊則修輔之今尚存焉其寛文中地震九輪水炎折而墮地、其先宝生院俊盛勸化道俗加修理也。

304 寛文三年四月十六日(1663-V-23, 2328601)、日光に地震あり。(1-838)

〔中山目録〕へ続々、9

十六日、甲寅、巳中刻地震、少時而止。

301 慶長十八年八月上旬(1613-K-15, 2310454)上総鶴谷八

305 延宝四年七月十八日(1676-W-27, 2333446)、京都に地震あり。

〔お湯どのの上の日記〕
十八日、はるゝ、少かせ吹、雨ふる、はるゝ〔頭書〕少ちしんゆる。

306 延宝四年十二月四日 (1677-1-7, 2333579)・京都に地震あり。(1-875)

〔お湯どのの上の日記〕
四日、はるゝ、〔頭書〕八つ時地しんゆる、少しつゝ三四度ゆる。

307 延宝五年七月十八日 (1677-Ⅶ-16, 2333800)・京都に地震あり。

〔お湯どのの上の日記〕
十八日、はるゝ、神成、地震少ゆり、雨ふる。

308 延宝七年七月十五日 (1679-Ⅶ-21, 2334535)・京都に地震あり。(1-886)

〔お湯どのの上の日記〕
十五日、雨ふる、夜ニ入地震ゆる。

309 延宝八年閏八月八日 (1680-Ⅷ-30, 2334941)・京都に地震あり。

〔お湯どのの上の日記〕
八日、はるゝ、〔頭書〕とらの刻地震ゆる。

310 延宝八年十一月十六日 (1681-1-5, 2335038)・京都に地震あり。

〔お湯どのの上の日記〕
十六日、晴、夜雪ちる、地震ゆる。

311 天和元年五月十日 (1681-Ⅴ-25, 2335209)・京都に地震あり。
〔お湯どのの上の日記〕
十日、はるゝ、地しんゆる、雨ふる。

312 天和二年八月四日 (1682-Ⅷ-5, 2335646)・京都に地震あり。
〔お湯どのの上の日記〕
四日、晴、少地震ゆる、かみ少なる、夜ニ入雨ふる。かみなる。

313 天和三年十一月二十二日 (1684-1-8, 2336136)・京都に地震あり。

〔お湯どのの上の日記〕
廿二日、はるゝ、〔頭書〕夜ちしんゆる。

314 貞享元年二月二十四日 (1684-Ⅱ-8, 2336227)・京都に地震あり。

〔お湯どのの上の日記〕
廿四日、はるゝ、八つ時分地しんゆる。

315 貞享元年三月二十四日 (1684-Ⅲ-8, 2336257)・京都に地震あり。

〔お湯どのの上の日記〕
廿四日、はるゝ、雨風神なる、地しん也。

316 貞享元年四月十四日 (1684-Ⅳ-28, 2336277)・京都に地震あり。

〔お湯どのの上の日記〕
十四日、雨ふる、夜地しんゆる。

317 貞享元年十月十五日 (1684-X-21, 2336454)・京都に地震あり。(I-906)

〔お湯どのの上の日記〕
十五日、はるゝ、地しんゆる。

318 貞享二年九月三十日 (1685-X-27, 2336794)・京都に地震あり。

〔お湯どのの上の日記〕
卅日、はるゝ、ちしんゆる。

319 貞享三年八月十六日 (1686-X-3, 2337135)・遠江、三河に強い地震あり、江戸、京都でも感ずる。(I-922)

〔お湯どのの上の日記〕
十六日、はるゝ、あさ地しんゆる。

320 貞享四年二月二日 (1687-III-15, 2337289)・京都に地震あり。

〔お湯どのの上の日記〕
二日、晴、夜ニ入ちしんゆる。

321 元禄十二年二月一日 (1699-III-2, 2341668)・京都(?)鳴動あり。

〔皇年代略記〕入正、32<
十二年二月一日、夜鳴動。

321 元禄十六年十一月二十三日 (1703-III-31, 2343432)・南関東に大地震あり。相模、武蔵、安房、上総で多大の被害が出る。大津波を伴い房総半島から伊豆半島で大きく、余波は土佐にまで及んだ
〔元禄地震〕(II-35)

〔皇年代略記〕
十一月廿二日江戸大地震、相州同断、海辺津波人多死、十二月四日江戸大火事、依変異公家御祈。

〔澹泊斎文集六〕入続々、13< ○檢例提要序
(○貴重な書籍の保管について述べる文)

蔵于水城庫内、以避祝融之難、凡祝聴家乘自元和元年正月朔、至享保四年十二月晦、一百六十六卷、其寛文十二年祝聴家乘、元禄八年家乘、罹元禄癸未之災而為煨燼者、不在此数、其記、両先君為世子時事、暨、靖伯恭伯両世子(○以下略)
〔鶴岡八幡宮寺供僧次第〕入続、104< ○義融法印の条、鎌倉元禄十六年十一月廿二日地震之時、客殿倒庫裏計相残。

323 天保元年七月二日 (1830-III-19, 2389684)・京都に大地震あり。御所、二条城など破損、京都で死者二百八十人、龜山で死者四人を出す。近隣の諸国も強い地震を感じる。(III-286)

〔新撰座主伝三〕入続々、2<

七月二日申時大地震、御祈奉行万里小路辨消息御到来、地震及数刻、叡襟最不安、因茲、一七箇日、一寺一同抽誠精、宜奉祈天下泰平宝祚長久万民安穩之事、右早可令下知子延曆寺給之旨、被仰下候也、

七月二日

大納言僧都御房

追到著次第早々可有御祈始之事、地震及数刻、叡襟最不安因茲、一七箇日、一寺一同抽誠精、宜奉祈天下泰平宝祚長久万民安穩之事、右早可令下知子延曆寺旨、被仰下候趣、畏思召候、此旨宜御沙汰被成給候也、

七月二日

宝海

万里小路 殿

別紙之通唯今被仰出候間、一山一同可抽丹誠之旨、

座主宮仰如斯候也、恐々謹言、

七月二日夜寅時

藤進法印

為純判

山門

三院執行代中

追而御祈奉行万里小路辨殿ニ候也

執行代不動院徳法、執行代寂光院亮音代別当代則賢等、連判請文、同三日午時到来、○同月九日執行代寂光院參殿、地震之御祈去三日開闢、今朝結願、卷数一合持參、同十日以御使為純被附奏者所、

卷数表包云

根本中堂御祈禱之卷数

延曆寺 大衆等

同月十日再御被仰出、奉行万里小路辨消息云、地震経数日、宸襟愈以不安、去二日已来雖既憑三宝之冥感、靈験猶未全、因茲自明日十一日更一七箇日之間、天下泰平御祈、一寺一同愈可凝丹誠之旨、延曆寺可有御下知之事、既刻被及御下知、為純奉書如例、○同十三日、自禁中以女房侍從内侍局奉書、地震之御祈、於日吉社可勤仕、被仰出、御撫物并白銀三枚下賜之、御請文有之、同月十四日生源寺大隅守被召出、御撫物一合、白銀三枚被渡之、来十六日可為開闢之旨、法印為純申渡、○同十七日執行代不動院參殿、地震御祈今日満座卷数持參、同十八日以御使大谷法眼被附禁中奏者所、

324

天保四年十月二十五日 (1833-Ⅱ-6. 2390889)、奈良に地震あり。

〔正倉院宝物御開封事書〕

十月廿五日、快晴、夕七ツ時ヨリ夜ニ入雨、八ツ時地震有之。